

444
275

郷土の烈士先覺に續かん

下巻

大政翼賛會石川縣支部

始



特 232
113



郷土の烈士先覺に續かん 下巻

大政翼賛會石川縣支部





郷土の先賢に續かん 下巻目次

大正圖書館百川綴支路

郷土の先賢に續かん 下巻目次

一、枝 權兵衛……………	中川隆治……………一
二、關 口 開……………	佐藤重友……………三
三、嵯 峨 壽 安……………	新村助喜……………七
四、清 水 誠……………	東 正 章……………九
五、久 田 佐 助……………	市 田 渡……………壹
六、高 多 久 兵 衛……………	高 木 茂 雄……………叁
七、小 野 太 三 郎……………	東 正 章……………七
八、石 田 虎 松……………	中 川 隆 治……………八
九、高 峰 讓 吉……………	佐 藤 重 友……………九
一〇、上 杉 慎 吉……………	新 村 助 喜……………一二

二、北條時敬……………	松村文吉…二三
三、南郷茂章……………	高木茂雄…二三
三、朝日長章……………	中川隆治…一四
四、清水吉雄……………	市田渡…一六
五、本多利明……………	新村助喜…一七
六、田中躬行……………	松村文吉…一八
七、上田作之丞……………	吉村榮…一九
八、本田政均……………	吉村榮…二〇

序

大東亞戦争は實に皇國肇創の理念たる八紘爲宇の神謨に基づき、東洋諸民族の共存共榮を確立し、進んでは世界人類の福祉に寄貢せんとする曠古未曾有の聖戰である。

宣戰の大詔渙發せられて茲に二年有餘、戦局は日に苛烈を加へ、銃後亦深刻なる國力戰の陣頭に、總進軍の巨歩を揃へつゝある時、苟も個人・自由・功利に關する米英思想は、之を國民心頭一炬の煙に附してその殘滓をも留めざらしむると與に、君國の大義に一身を殉ずる日本精神の鼓動に嚮つて多々益々鐵鞭を加ふるの要、蓋し今日より急なるはない。

大政翼賛會本部曩に戦力増強の基盤として國體觀念の徹底、國民精神の昂揚に資せんがため、全国各地に於る勤皇護國の烈士先覺者に對する顯彰運動を展開するに方り、當支部亦之に倣ひ、郷土の諸家に屬して委員會を設け、我が石川縣に因縁深き勤皇の士を首めとして或は學術に文化に教育に思想に、或は軍事國防に殖産興業に經世濟民に社會公共に、功績尤も

顯著なる幾多の故賢先哲に就いて慎重精査の上、之が顯彰の一途として茲に本書刊行の運びに至れるは、衷心欣快に禁へぬ次第である。

今や宿敵米英の熾烈なる總侵攻を邀へて戦局の重大、眞に言語を絶するものあり、皇國の興廢その關頭に立てる秋、今こそ一億國民は至心沒我、總てを一君に捧げまつりて戦鬪配置の第一線に、戦力増強の最前線に、渾身烈々の鬪魂を結集するにあらずんば、皇國の前途正に測り識られざるに當り、本書の刊行せらるゝ亦決して徒爾ならずと信ずる。

惟ふにこの書の敘する處、専ら簡明を旨として瑣末を避けたるため、必ずしも微を穿ち細に入ることなしと雖も、讀者幸に由りて以て郷土に於るこれ等偉人傑士の高風を欽し清節を仰ぐと共に、奮躍興起その芳躅に續かんとせらるゝものあらば、寔に望外の喜悅である。

尙本書の刊行に際してその間終始多大の努力協賛を賜はりたる委員並に關係諸賢に滿腔の謝意を表明する。

昭和十九年四月

大政翼賛會石川縣支部事務局長

石川縣勤皇烈士顯彰委員會委員長

越 生 虎 之 助

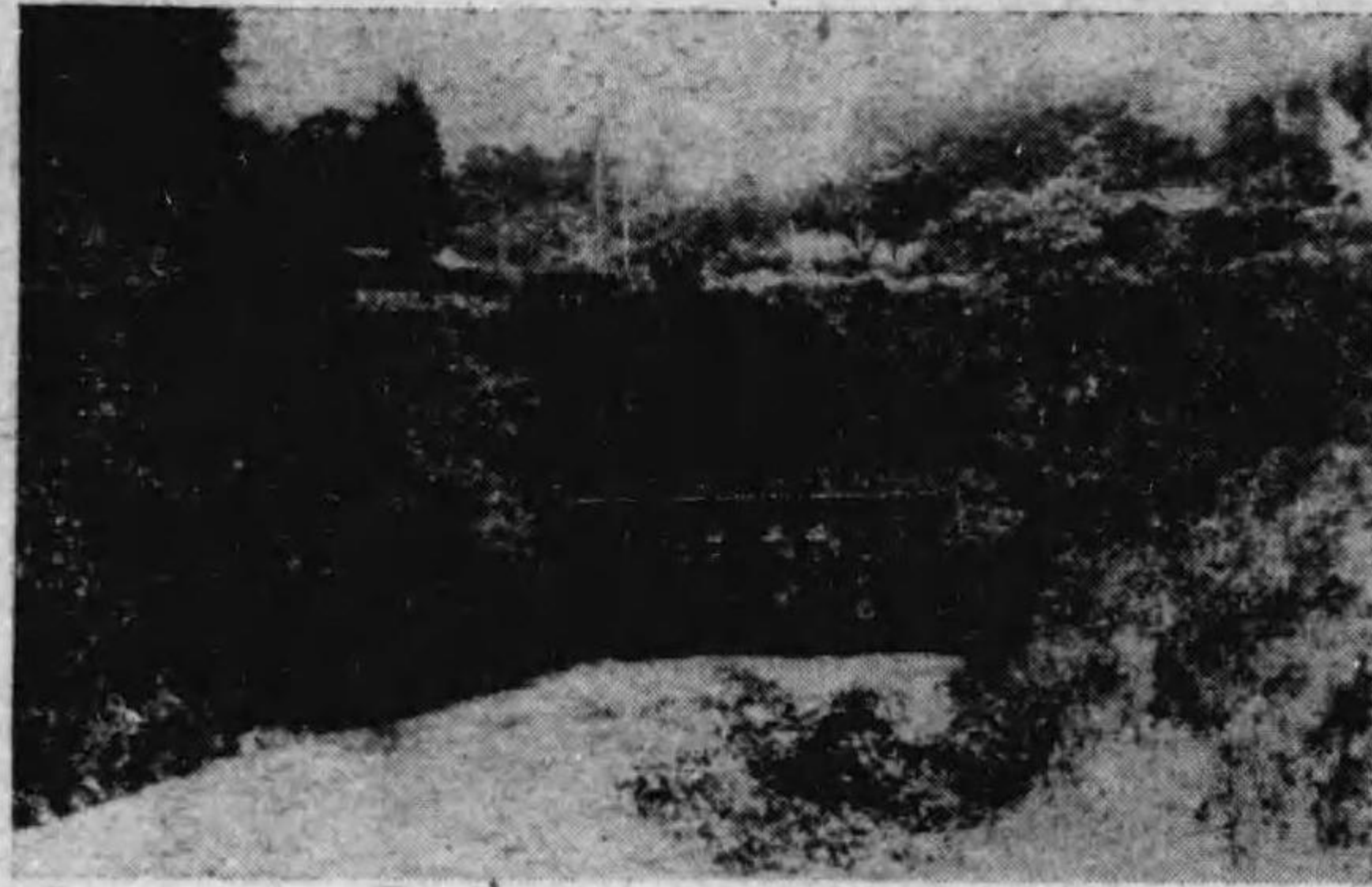


衛兵權枝

五月、白山詣での電車は鶴來驛を離れると次第に速力を早める。このとき右に水碧く石白き手取の本流を眺め、左に清流満々たる七箇用水路を眼下にする。やがて加賀一の宮驛に下車して、道を稍下り、用水の隧道附近に立つと、目の下遙か隧道口から奔流する水の、或は岸壁に激し、或は互にからみあつて白しぶきと散ずる様、まことに名狀に難く、その物凄さに思はず襟元の寒くなるのを覚える。こういつとうなりすさまじく流れ出た水は急湍の如く先を競つて流れ去る。堀割の勾配が餘程急なるものと見える。

農業、わけて稲作を以つて世に知られてゐる石川郡、一望十里のこの大平野を殆ど灌漑してゐる七箇用水、その取入口に臨むと、誰でもがその豊富な水量と永久に絶えないと思はれる流れに感歎の聲を放つとともに、思ひを靜かに先人の偉業にひそめずにはゐられないのである。

如何なる旱天、如何なる洪水が訪れようとも七箇用水流域町村に、その被害の大きかつたことを聞かない。三思すれば、七箇用水の恩澤の偉大なる、よく人智の測り得る所でない。



七 箇 用 水

そも、今を遡る八十年前の七箇用水の姿は如何なるものであつたであらうか。

當時その前身たる富樫用水は、現在の取入口よりすつと下流の通稱十八河原と呼ばれる箇所にあつた。その規模貧弱、もとより今日の比ではないが、それでも關係流域三十九ヶ村に亙り、その作付段別は一千八百町歩の廣大なる地域を占め、石高にして一萬七千有餘石を算した。

然るに取入口の不適は、毎年降雨時期になる度に、忽ち汎濫、堰堤を崩壊、青田を濁流渦巻く大川と變ぜしめ、更に設備の不完全はしばしの旱天に、灌漑水の缺乏を訴へしめるなど、その被むる損害と

苦痛は見るに忍びない有様であつた。

「富樫用水は何とかならぬものか。」とは關係農民の血の叫びであり、長い間の宿命的念願でもあつた。けれどもかゝる積極的精神の反面、一つの諦観も傳統力と信仰を有つてゐた。

「お天道様の仕業だ。水は神に祈るより他にない。」といつて旱天毎に雨乞ひの祭も行はれた。

だが、かうした忍苦の生活にも、打開の光明が近づいたのである。恰も明治維新の黎明と時を同じくして、天は遂にこの前人未到の大問題に解決を與へる偉人を郷土農民中に生み出した。

時こそ文化六年一月十五日、加賀國石川郡坂尻村に呱呱の聲をあげた一男子、これぞ後年農民史に一大金字塔を建設した七ヶ用水の鼻祖枝權兵衛その人である。

人となり天資聰慧、廉潔能く時勢を洞察し、將來を達觀した。早くより郷民間の衆望を擔ひ、文政八年歳甫めて十七にして居村坂尻村の肝煎役を仰せつけられたのを振り出しに、爾

來明治十一年二月に至るまで公職に携はること、實に前後五十有餘年の久しきに亙つた。

その間恪勤精勵、自ら實踐躬行、言擧げせざる陣頭指揮を行つた。しかも常に公事に熱中聊かも私事を圖るが如き事はなかつた。かつて自ら荒蕪不毛の地を開拓し、貧窮産なき者に與へて毫も代償を求めなかつた。又明治初年において、教育の重大性を悟り、自己所有地内に校舎を建築造營して校下に無償貸付するなど、權兵衛の面目の一半を窺ひ知ることが出来る。

權兵衛、幼より用水について憂心をいだいたが、やがて用水肝煎になるに及んで、こゝに眞劍なる命題として日夜取り組むに至つたのである。

旱天ともなれば、毎年の如く起る郷間の反目争鬭、更に洪水は農民の生命たる水田を一瞬にして潰滅し去る。あゝ、一日も早く文字通り平和なる農村にすることは出来ないか。

誠意と熱情に燃える權兵衛は遂に立ち上つた。彼は先づ單身日除笠と腰辨當の姿で手取川の調査に出かけたのである。



調べれば調べる程、この不完全なる用水口を一擲して新取入口を見出すより他に道はないと覺悟した。彼の探査の歩は一步々進められていつた。

「此處からでもない。あすこも不可だ。」彼は次第に手取川を遡つた。やがて白山村安久濤の深淵に臨み、その水勢、位置を眺望したとき彼の胸は豁然と希望にわなないた。彼の眼はらんくと光つた。

「あすこだ、」「あすこより他にない。」彼は思はず獨り言して拳を固くした。だが水流の衝騰する所、更に其處に横たはる巖山の堅さに見入つたとき、權兵衛は事の容易ならざるに沈思しなければならなかつた。

農民權兵衛は、獨力これに當る勇猛心はあつても、

藩政下事は簡單には許されなかつた。彼は藩吏の中にこの工事の理解者後援者を尋ねた。幸ひにも彼の前に得難い同志が現はれたのである。藩臣本多圖書の與力にして、藩の産物方たる小山良左衛門である。

權兵衛の熱心に説く所を聽いた良左衛門は大きく肯いて、一切の後援を承知した。

良左衛門にも豫て一つの想ひがあつた。この案は、手取の流れを堀割によつて尾山に通じ、舟楫の便を得て物資の運輸に貢献したいといふのがその企圖する所であつた。目的は異なる雖も工事に對する兩者の意見は一致した。

二人は役人、農民の差別を離れてあくまでこの事業貫徹に挺身せんことを誓ひあつた。

首途の決意はなつた。二人は更に地勢を丹念に調査し設計の綿密を期し萬遺憾なからんとにつとめた。

一度この企畫を關係農民に發表するや、長年苦痛に悩む郷民は翕然として賛同した。しかし、工事の難きを思ひ、果して成就するや否やを危懼する者も多かつた。唯日頃の權兵衛の

人徳と強い信念が人々を導いたのである。

慶應元年、白山の嶺に春雪皚々、手取川の清冽尙氷の如ききさらぎ半ば大望の隧道開鑿に着工した。

権兵衛自ら陣頭に立つて督勵した。巖盤に打ち下す土工のつちは附近の静寂を破つた。けれどもそれは徒らにはね返るのみで峨々たる岩石は容易に破れなかつた。器械力の乏しい當時として人力に頼る以外手はなかつたのである。加へて、安久濤の深淵は工人を魅し、怖れはその工程を阻んだ。

この難工に直面し、権兵衛は日夜苦心慘憺すると雖も、關係農民の心はすでに動搖し始めた。造言は造言を生んで、はやてのやうに村々を吹き荒れた。

「えらいと思つた権兵衛は山師だつた。」

「大切な食をたゞ取られた。」

「早く徒ら事を止めてしまへ。」

非難は關係農民だけでなかつた。権兵衛の苦境に乗じて心なき土工は結束して、多額の勞銀を要求した。権兵衛がその無理を説くや、土工等は難工の現場を見せると稱して、権兵衛を舟筏に乗せてつれ出し、舟の顛覆を以つて彼を脅かした。

もとより着工の始めより生死は彼の問ふ所でなかつた。彼は如何なる重圍に陥るとも敢然として屈しなかつた。たゞ工の遅れないやう祈るのみであつた。

經費不足は彼をして、しばしば郷民間を説いて廻らせた。しかし報ゆるに冷笑と白眼をもつてせられた。かうした四面楚歌のうちにも権兵衛に對する良左衛門の情義は初志の如く敦かつた。彼は役柄をもつて、數回に互り産物方より藩帑を借り融通もしたが、なか／＼續きはしない。権兵衛は黙々として私財を擲つて工費に充てた。

「ローマは一日にして成らず。」

確固不拔の信念と燃ゆるが如き熱情に挺身する二人は、幾多の障碍を次々に破碎し工事を續けていつた。

明治二年の五月、白嶺の雪は淡く、温む手取の水に稚鮎が飛び交うてゐた。

さしも難工を重ねた安久濤ヶ淵より九重塔までの隧道開鑿と九重塔より鶴來古町迄の堀割工事は竣工した。

この総工費は當時の費用にして六萬貫であつた。

その取入口は五條よりなり、豊富な水量は滔々として流れ、權兵衛の達見空しからず、本流の減水と雖も灌溉に事缺かず、又本川の氾濫には堅く水門を閉ざして水害を免るゝなど、雨につけ、早につけ安き心のなかつた三十九箇村民はこゝに全く救はれたのである。

先に非難をあびせた造言の徒も深くその不明を慚愧し、經費負擔を申出る者多數に及んだのであつた。

取入口は其の後多少の變遷を経て今日の七箇用水の大をなしたとはいへ、その基礎をなしたのは權兵衛である。

時人は權兵衛と良左衛門との生祠を造り水神としてあがめた。

明治十二年二月二日、權兵衛は坂尻村の自邸で、靜かにその輝かしい一生を終つた。享年七十有二であつた。

權兵衛は生前、細面に柔和な笑ひをたゞへて村民に語つてゐた。

「白山を拜め。おれたち百姓は、白山のお蔭で生きてゐるのだ。」

又、水争ひが起ると、

「み山のしづくを戴いてゐる私どもだ。神佛のこの流れをわづかにもせよ、獨占するいはれない。少なければ少いで分け合はう。それがみ山の思召しだ。」と、説いた。

白山は永遠の氷雪をいだいて何時に變らぬ崇高な姿を見せてゐる。あの神々しい山容を仰ぎ白山様のお蔭をうれしむとき、そこには水神枝權兵衛の靈が今も尙石川の平野を見守つてゐるのがありくと見えるのである。

昭和三年十一月十日、即位の大禮を行はせられるよき日、國家に功勞のあつたものに對し、



關 口 開

特別の御思召に依り贈位の御沙汰があつた。乃ち枝權兵衛の事蹟はかしくも天聽に達し、治水功勞者として従五位を賜はり、その餘榮は千古にかほることとなつた。

少年安次郎

黄昏の庭に梅花がほの白く匂つて居る。馥郁とした香が夕闇と共に流れて来る部屋の中で、安次郎は先刻から身動きもせず机に向かつて居る。何處か遠い所で北國の長い冬から解放された子供達の明かるい聲が聞えて来る。よく晴れた早春の夕暮であつた。

「安次郎。」

縁を踏む足音が近づいて来て兄の匠作が聲をかけた。

「少し遊びに出ないか。」

「あゝ。」

返事をしたが安次郎は立上る様子もなく、相變らず机上の本に瞳を吸はれて居る。

父の信吾はまだ歸らないらしく、邸内はひっそりと静かである。匠作は手持無沙汰にすっかり雪の消えた庭を見て居た。

「兄さん、この問題どうしても解けないよ。」

暫くして安次郎は初めて顔をあげた。幼い澄んだ瞳に激しい求學の熱情を持った少年である。

「どれ。」

兄の匠作は横に坐ると、これも弟に負けない程熱心な瞳を算數書の上に注いで行つた。

春の日は暮れようとして暮れなづみ、遠くから夕暮の鐘が響いて来る。

和算大成の途

西洋算法の開祖關口開、幼名安次郎は松原信吾の第四子として、金澤市泉町に生まれた。

天保十三年六月、今より約百年前である。

彼は少年の頃から學問に對して深い情熱を持ち、兄匠作につき常に算法を學んで居たが、不徹底な箇所があると質問の鋭鋒を放つて、容易に満足しなかつた。

夜中ふと目を覺した匠作が隣室の灯を訝つて立つて行くと、ほのかな行燈の下に少年安次郎は無心に勉學に没頭して居た。



彼の天稟の才能は幼いながらも次第に其の頭角を顯はし、やがては兄の匠作をさへ凌いで行かうとするのである。

安政四年、彼はのぞまれて關口家の養子となり、年十六歳、初めて和算の大家瀧川秀藏の門に入つた。彼の勝れた算才は年と共に愈々磨きを加へ、日ならずして同門中に畏敬されるに至つた。

萬延元年初段免許となり、文久二年中段免許、同四年皆傳と共に指南目錄を受け、早くも學術大成の域に達したのである。時將に弱冠二十三歳であつた。

西洋數學の世界へ

默然と深更の靜寂に坐しながら、開は何か熱心に考

へつめる様な深い瞳になつてゐた。彼の頭の中は先刻會つて教を受けた戸倉伊八郎の西洋算法の魅力で一杯だつたのである。彼は西洋數學の持つ精深さに、和算が次第に壓倒されて來るのを感じた。

「さうだ。もう和算の時代ではないのだ。西洋數學、西洋數學にひたぶる精進して行かう。」
彼はかう考へると急に何か新しい勇氣が、湧いて來るやうであつた。

戸倉伊八郎は長藩出身で、今度西町に設けられた學問所致遠館に、數學と航海術の教師として赴任したのであつた。開はやがてこの學問所の生徒となり、新しい西洋數學の世界の戸を叩いたのである。既に和算大成の域にまで達して居た彼は、持前の鋭い算才と熾烈な求學心によつて、著しい進歩の跡を見せて行つた。

當時、藩政の末期に際し、海内騒然として兵亂相つゞ時勢であつた。開も藩命を帯び、東奔西走身邊實に多忙を極めたが、彼の勉學の熱意はかうした中にも、些かの弛みをも見せなかつた。

英才開の倦まざる研究心は彼の學術の進展と共に、やがて師の講義のみでは満足せず、師伊八郎の有する教授手控一覽を一見したいと念願して止まなかつた。

開は或日思ひ切つて懇願してみた。

「先生、先生の持つていらつしやる教授手控一覽を見せて戴けませんか。」

「いや、是は君達が読む必要はない。」

彼の師はぶつつと言ひ切つたのみであつた。然し彼が執心した此の本が思ひがけなく手に入る時が來た。或日晝飯に去つた師の机上に、ぼつりと此の一冊の本が忘れられてゐるのを見ると、彼は夢中に之を謄寫したのである。

翌日、彼は多くの難解な問題を容易に解いて學友達を驚嘆させた。

「おい、關口君、君は偉いなー、どうしてそんなの解けるかね。」

友人の感心し切つた顔を見て開は、明かるい無邪氣な表情で笑つた。

「なーに、先生の本を謄寫したんだよ。」

然し之が彼の師に聞えぬ筈がない。

「關口は不埒な男だ。」

激怒した師は即座に破門を命じた。

「先生、それは酷です。關口がかはいさうです。」

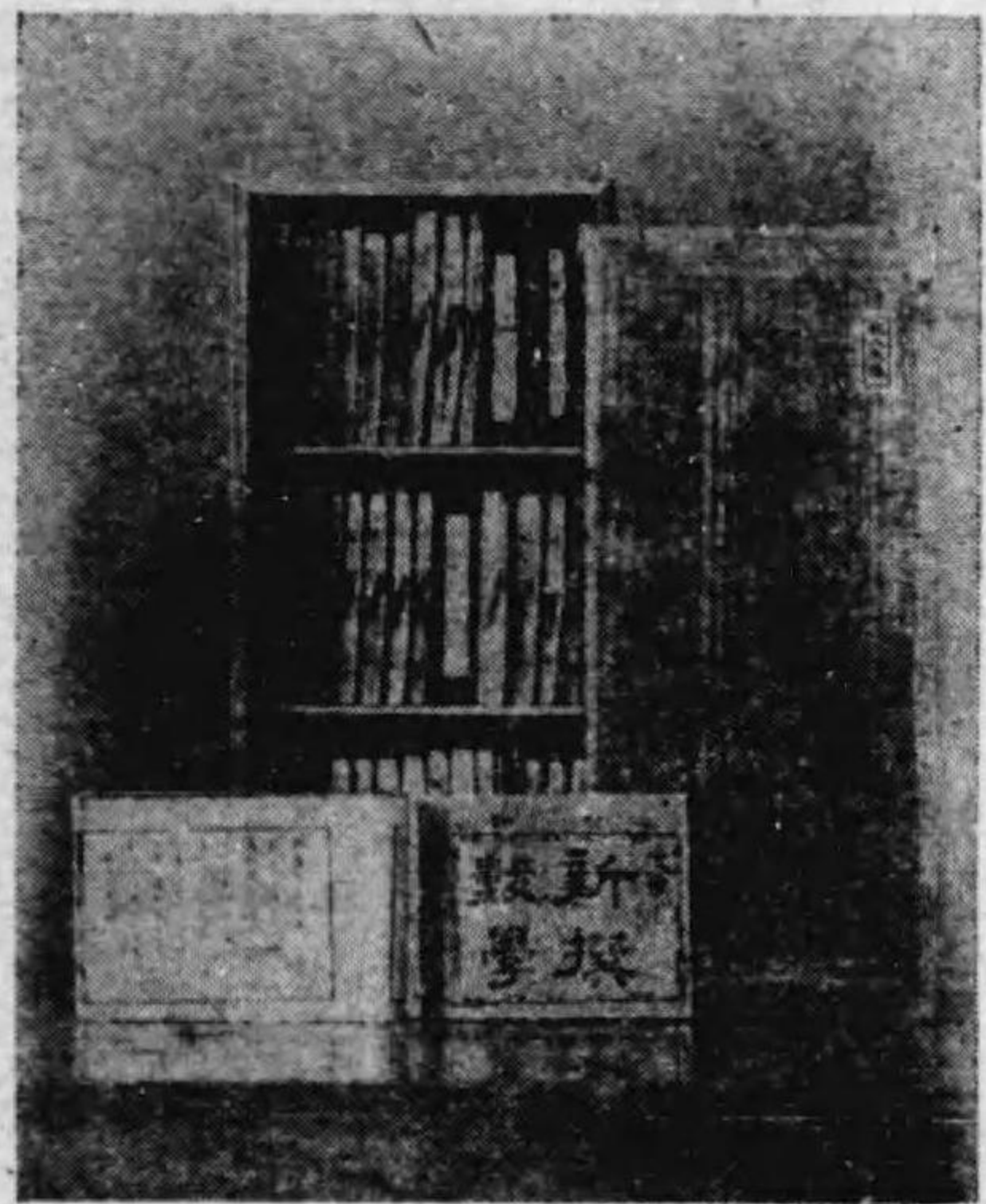
學友達の誠意あるとりなしも、師伊八郎の固い怒りを解く術はなかつた。

獨學洋算への敢闘

學問所致遠館の破門は却つて開の求學の闘志を鞏固にした。今や彼は微弱なる語學の力で惡戰苦闘、獨力で洋算の研究に没頭して行つた。

明治三年、彼は岡田秀之助の歸朝に際し齋せし英人、「ホットン」及び「チェンバー」の數學を手に出ることが出來た。彼の語學力によつては到底讀む事すら出來ない程の難解な數學書ではあつたが、彼の不屈の精神力と蘊蓄せる算才は、遂によく其の意義を悟り、文字通りの努力の結晶はやがて「數學稽古本」及び「數學問題集」の二大譯出となつて著れたのである。

これ、當地に於ける西洋數學書刊行の初めであり、同時に又本邦にても嚆矢であつたらう。後更に研鑽を積んだ彼はこの「數學問題集」の度量衡が外國制度なることを遺憾とし、之を本邦制度に改め、且又内容を改善して、「新選數學」として發刊した。この書一度世に出づるや、全國靡然として之を用ひざるはなく、版を重ねること實に六回、出版部數二十二萬部の多きに上つたのである。全國都鄙至らざるなく、斯學開發に貢獻せし事、又偉大であつた。京阪地方にはこの偽版さへ出で、それが又何萬冊の賣行きを示したことを見ても、如何に聲價の高いものであつたかを知ることが出来るのである。



著書

その後、開の著譯は益々拍車をかけ、數多くの外國書を取り寄せ日夜寢食を忘れて推究し、獨學自立、遂に加賀藩洋算家の鼻祖となつた。

彼は明治二年藩學校洋算教師を拜命して以來、師範學校、專門學校等に教鞭を取り一方豎町の自宅に衍象舎を設けて子弟の教育に當り洋算の普及發達に全幅を傾けたのである。

洋算教師として

「關口先生は西洋の算學を究め、算盤に依らず難問を解き、又鍵を用ひずして門戸倉庫を開ける。」

當時の人々はかう言つて彼を景仰したとの事である。或る弟子の一人がこの事を語ると彼は明かるく笑つて答へた。

「總べて何事もその理を究むれば解決せぬ事なし。君等もよく勉勵せよ。」

彼は弟子達への教授は常に啓發的で、その研究心を鼓舞した。門人達の輕卒な質問に對しては答へず、苦心の様子を見て初めて諄々と説くのであつた。彼が僅々の歲月に於て偉大な

業績を残す事の出来たのも一にこれが爲であつた。

「先生、先生は何故東京へお出でにならないのです。先生のような非凡な學才を抱きながら、こんな田舎に埋れなされるのは残念です。」

彼の將來を案する弟子達は常に彼の上京を懇懇して止まなかつた。

「學問を修めるのに何故出京の必要があらう。數學の普及を計るには先づよい教師を養成する事である。自分は此處で専らその任に當りたいと念じてゐる。」

強い信念を抱いてゐた彼は、北國の一都市にその生涯を終へる事に些かの不満も寂寥もなかつたのである。

倦まざる研究心

幽玄微妙の算學の世界は、究める程に感興深く、彼の旺盛な研究意欲は益々強くなつて行くばかりであつた。

嘗て京都に在勤の頃、彼はよく晴れた美しい晩になると屋上へ上つて行つた。

「おい、關口はどうした。何だ、あの男又屋根か。この頃毎晩だぞ。何して居るのかなー。」

若い友人達はよくかう語つて笑ひ合つた。一月經ち二月經ち三月經つても彼の屋上通ひは相變らず驚くべき熱心さで繼續されて行つた。降る様な星空を凝視してゐた彼が夜半の一時二時近く、ふらりと屋根から降りて來ることも珍しくなかつた。

かうして夜半の静かな夜空に對すること半歳、彼は何時か精密な星座の研究を遂げて人々の驚嘆を買つたのである。

その後彼は當時としては實に得難い外國製の懷中時計を手に入れることが出来た。カチカチと響く正確な機械の音、微細な一つ／＼の機械が生きて呼吸するかの如く、精巧に動く不思議さに彼は激しい興味を惹かれた。蓋を開けて動かしたり、止めたりして夢中になつてゐた彼はとう／＼この高價な時計を破損させてしまつたのである。然し彼のこの研究は聽て翌年、その頃としては珍しい「算法窮理法問答」の出版となつて顯はれたのであつた。

光榮ある生涯

數理の世界に天才的な頭腦を誇つた彼は、その他種々の方面に勝れた手腕を有してゐた。家庭にあつても書齋以外の時は常に細工場に籠り、建具、襖、戸障子の様なものは骨組から板張り、上張りに至るまで悉く自ら製作した。又机、小箆、一閑張等も職人に譲らず、晴雨計の製作、書畫の表装、令息の玩具等一つとして手にかけてぬ物はなかつたとのことである。一方又趣味廣く、月の冴えた晩、關口邸の奥から庭の木立を縫つて蕭々と尺八の音の響く事もあつた。

明治十七年四月十二日、洋算の研究に生涯を捧げた彼は、四十三歳の多望なる生命を終つた。

十六歳にして瀧川秀藏氏の門に入り、二十三歳、早くも和算大成の域に達し、明治二年戸倉伊八郎氏の許に洋算を學び、以後一途に斯界啓蒙の道を辿つて行つた彼の功績又偉大であつた。彼の門を出でて名を成せる者枚擧に暇なく、當時石川縣の算學は實に一世を風靡した

のである。

大正四年、御大禮の盛典に際し、在世の功績を嘉せられ従五位を追贈された。

尾山神社の神苑に建つ記念碑は、彼を永遠に追慕する門人達の手によつて建立され、本邦の洋算の未開曠野を開拓したその不滅の偉業を讃へてゐるのである。



安 壽 峨 嗟

嵯峨健壽は、越中の國東岩瀬に、傳馬問屋を営んでゐる大村屋の主人であつた。どうした
ことか、家業を繼ぐことを好まないで、奮然志を立て、京都に走つた。

京都にあつた健壽は、醫術を研究し、業成つて金澤に移り住み、十三間町で開業した。京
都仕込の青年醫者は、親切で見立ても確かだといふ評判が近郷近在にまで廣がり、病人の診
察を請ふ者が門前に溢れ、非常な繁昌振りであつた。

一正は、健壽の次男として、天保十一年に生まれた。幼いながらも實に大膽で、遊びごと
も誠に勇猛であつた。兄の眞次郎、弟の專之介、正作らと共に常に犀川の川原を遊び場とし
てゐた。一正が

「專之介、正作、見てゐろ。」

と、叫んで、橋から流に飛込んだ。

「何だ、それ位のことか。」

と、續いて兄弟は飛込んだ。この三人の兄弟たちに平氣で出来ることも、他の子供達には、

どうしても出来なかつた。

「醫者の子供に似合はず、元氣者だ。」

と、近所の大人達が感心してゐる程であつた。

父は、一正に醫業を繼がせようとして、當時長崎から歸り、藩侯の侍醫として、名聲天下
に高かつた黒川良安の門に入らせた。一正は、良安の下で、寢食をともにしながら、薬局の
手傳の暇を見つけては、語學・醫學を熱心に習つた。教へられること總てが珍しく、西洋醫學
の進歩に眼をうばはれた。夜を日についての刻苦勉勵の毎日であつた。蘭書の一行を讀破す
るに徹夜することも屢々であつた。したがつて成績も優秀であり、良安も將來を囑望してゐ
る一人であつた。一正も深く師に敬意を表し、父から「壽」の一字を、師から「安」の一字
をもらひ受けて、名も「壽安」と改めた。

語學・醫學を良安から受けた壽安は、一方町儒者井口濟の門に通うて漢學を學んだ。

その後江戸に上つて、大村益次郎の開いてゐる村田塾にはいつた。この塾には、郷里の先

輩である安達幸之助がゐた。幸之助は、益次郎の信任もあり、塾頭の榮位にあつて、塾生の教導にあたつてゐた。壽安はこゝでも猛烈な勉強をやり、オランダの新刊書は勿論のこと、ジャワの新聞・雑誌までも取り寄せて片端から讀破し、遂に塾頭となつた。壽安が海外の事情に通じ、世界的識見が養はれたのは、全くこの時である。壽安は、幸之助とは十歳餘りも若輩であつたが、常に肝膽相照らす仲であつた。

ある日のことである。塾には誰もゐなくて珍しく二人はゆつくりした氣持で對坐してゐた。

「安達氏、今日は一つ貴殿のお考へを承りたい。」

「と、申されると。」

「實は、現今世情誠に騒然、英佛は今にも東亞侵略の魔手を我に下さうとしてゐるが、わしの觀るところでは、英佛よりも、先づ日露の衝突が起るべきものと思ふが……。」

「英佛にしろ、露國にしろ、ともに一つ穴の貉。」

「それはもつともなこと。然しわれを眞先に窺つてゐるものは露國と見たは、僻目であらうか。」

「御説には全く賛成だ。して、それに對する策がおりか。」

「對策と、さう短刀直入にお突き下されては、當惑するが……、何とかして露國に渡り、その國內事情を探知致し、一朝有事の際國家に奉公したいと存するが。」

「それは實に卓見だ。わしが現在全精力をぶち込んで研究してゐる陸軍が生きるといふもの。」

「陸軍が生きるとは。」

壽安は不審さうに問ひ返した。幸之助は微笑しながら、聲を落して

「敵を求めて攻めるのが、陸軍の訓練目標だ。日露は既に北邊に於て衝突してゐる。この小競合は、將來大陸へ移り、大陸が決戰場となる。」

「成程、感服いたしました。」



シベリヤ地圖

「いや、貴殿こそ。出来得る限りの援助をいたさう。」
 壽安は常に雄心勃勃として露國遠征の企を内心深く
 藏して、その機會を待った。

たまたま露國の軍艦が横濱に来ると聞き、年來の宿
 志を遂げるの好機と驟然立つて横濱に走った。が、既
 に函館に向けて出航した後であつた。このまゝ歸郷す
 るには餘りに彼の心は燃え立つてゐた。直ちに陸行三
 十日を要して函館に追つた。

函館にたどり着いた壽安は、露國領事館を訪ねた。
 こゝで青年僧侶ニコライと近づき、相互に國語の交換
 教授をなし、或は露和辭典の編纂を手傳ふなどして露
 語を學ぶと共に、訪露の目的を達しようと企てたが、

その機會はなかく來なかつた。

然しこの位のこと、失望落膽する壽安ではなかつた。やがて明治元年となり、加賀藩では藩治に資しようとして、十指に餘る人々を留學生としてヨーロッパに送つた。これを見るにつけ、壽安は美望やる方なく、露國內偵の雄心勃勃として湧き起り、立つてもゐてももられなかつた。

明治二年五月二十日、露國遊學の藩命が遂に下つた。雀躍した壽安は、

予素草莽布衣兒。

今辱君命赴魯夷。

唯願他日鍛鍊鐵。

銳爲秋水護皇基。

の一詩を作つて、その感懷を述べた。年壯氣銳の快男子が、身を以て國家の急務に應じ、生還を期さないでゐる意氣衝天の氣概を見るべきである。

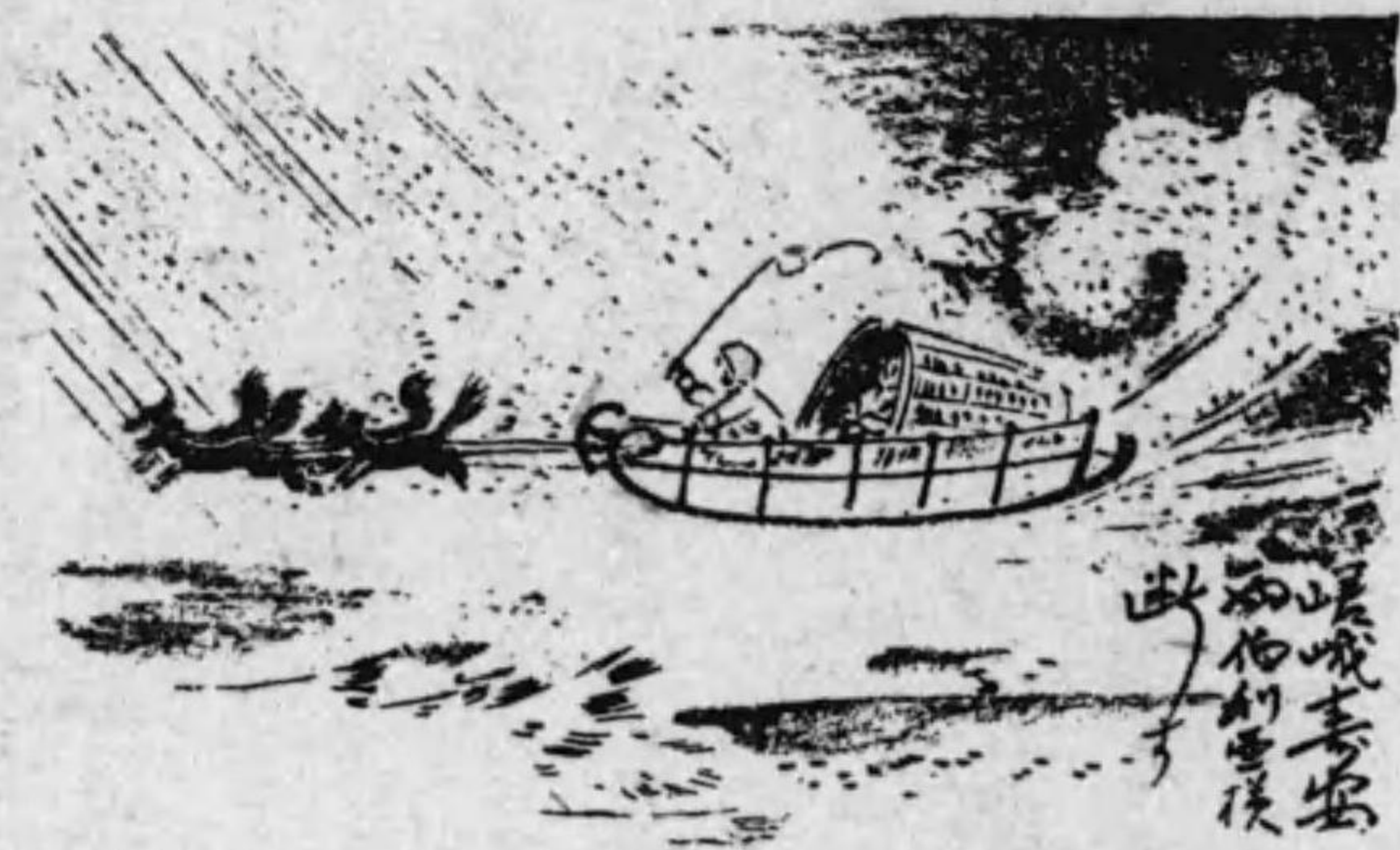
かくて直ちに旅装を整へた壽安は、所期のシベリヤ横断を藩侯に上書して横濱に到り、翌三年一月米國汽船に搭乗して函館に着き、五月露艦エルマーク號に便乗してウラジオストツクに上陸した。

ウラジオストツクは開港以來僅かに五年を経たばかりで、誠に寂寞たるものであつた。然し壽安は、心の中で露國がこゝを根據地として日本への侵攻態勢をとるであらうことを豫想して慄然としたのである。そしてシベリヤ横断の決意をいやが上にも燃えたたせ、更に探検心をあふつたのである。

こゝからニコリスクへ行き、ウスリー河を船で下つて、黒龍江との合流點ハバロフスクへ出で、河の廣大なのに先づ一驚し、

「露國は河を傳つて侵攻の毒手を伸ばすぞ。」

と、長大息したのである。更に黒龍江をゼイヤ號で廻り、ウオツカに酔がまはると、謡曲を聲高らかにうなり、一週間後にブラゴエチエンスクに到着したのである。ムラビョー伯の



結んだ愛琿條約を思ふにつけ、「毒手が川を下つて近づきつゝある。」と感じて憤激にたへなかつた。更にストレチエンスクまで航行し、こゝで馬車に乗りかへ、ほど近いネルチンスクで旅行馬車を買ひ求め、チタキヤフタを経、曠漠たる大平原、人跡未踏の惡地に惱まされながら、かてて加へて凜烈の朔風を凌ぎ、兇賊横行の危険を冒し、やうやくにしてイルクーツクに着いた。こゝで露國官吏から取調べを受けねばならなかつた。

「いや怪しい者ではない。露都へ勉學のため出かけるのである。」

と、海外旅行免狀を出して見せた。露國官吏は、意地

悪さうに、

「その荷物の中を見せろ。」

「身廻品がはいつてゐるだけだ。」

「兎に角あける。」

といふが早いか、無理にこじあけて、中をすつかり亂してしまつた。壽安はカツとなつて蹴飛ばしてやりたい衝動にかられたが、重大な使命を前途に持つてゐることを思ひ、怒りをおさへて涙をのんだ。

更にクラスノヤルスク・トムスクを過ぎてウラル山脈を越え、ペールムに出て、馬車を橋に乗りかへ、カザンに至り、ノーゴロトへ出たのである。壽安は初めて九死に一生を得た思ひで、初めて見る汽車に乗り、モスコーにはいつて、ペトログラードに到着したのは明治四年一月七日であつた。

露都に安着して數箇月、これから本格的な仕事に着手しようとした矢先、藩からの歸國命

令を受けた。藩から學資の出途は斷絶されても、壯心鬱勃、意氣衝天の壽安には飢寒困窮の如きは其の意に介するところではなかつた。唯々現下の急務に應じたい國家奉公の一念に燃えてゐた。

かくて壽安が露都に留ること三星霜、つぶさに歐亞の形勢を探り、明治七年の春歸國したのである。

歸國後衆愚に容れられず、處々を轉々として放浪生活をつゞけ、其の間露和辭書の編纂或は「韃靼事情」「東察加地方誌」「西伯利新法」などを著はして、明治三十一年十二月十五日廣島に歿した。

壽安が日露戦争まで生きながらへてゐたならば、シベリヤ横斷の體驗を生かして十分の活躍をしたであらうに、誠に惜しいことである。しかし露國侵攻を叫んで、シベリヤ横斷に成功した最初の人として、その冒險的膽勇と報國的熱誠は高く評價しなければならぬとともに、我らの郷土の先輩であることに、限りない誇りを感じるのである。



清 水 誠

パリーの一夜

明治の初年である。

フランスの首都パリーの一族舎にあつて、夜の更けるも知らずに熱心に語り合ふ二人の日本青年があつた。

「……何といつても今は先づ歐米の文化を取り入れることが急務中の急務だ。三百年の泰平の夢はあまりに長すぎた。何一つとして彼等紅毛に頭を屈せしめるものが日本にあるか。——たとへばこのさゝやかなマッチ一箇にしる、全然外國の品を仰がねばならない現状ではないか。」

かういつて机上にあつたマッチを取り上げ、撫然として眺めてゐるのは、白哲長身の吉井友實である。今日、はるくヨーロッパの旅の途中を、パリーに勉學中の友人清水誠を尋ねて來たのであつた。

清水誠は、加賀藩から選抜せられてフランスに留學中の俊才である。體軀大ならずといへ

ども、精悍の氣眉宇にみなぎる客氣の青年である。友人吉井の突然の來訪を受けて、さすがに驚喜して之を迎へ、歡待大いにつとめてかうして語り合つてゐるのであるが、今、談たましく机上のマッチにふれるや、吉井の顔を見上げて意味ありげにこりと笑つた。

「いや、吉井君、事マッチに關する限りは、自分に成算があるよ。」

「何、成算ありと。そ、それは一體……。」

せきこんで問ひかける吉井の言葉をおさへて、

「實は自分はこのマッチといふものを初めて見た時から妙に心がひきつけられ、これは必ず我が國內で製造し得るとにらんだ。幸ひ留學を命ぜられたので、勉學のかたはらこの製法をいろ／＼と研究して見た。完全とまではいかないが、この通り研究が進められてある。」

と、いつて後の書棚から部厚な研究文、さまざまの藥品、マッチの工程模型等を取り出して見せた。

吉井は思はず「お、お。」と、叫んで食ひ入る様にその一つ一つを手を取つてゐたが、やがて感激にみちて、しつかと誠の手を握つた。

「清水君、有難う。自分はお國のためにお禮をいふ。もうこれだけ研究が積まれてあれば大丈夫だ。やつてくれ、ぜひやつてくれ。及ばずながらこの吉井も、出来るだけの援助をする。」

「有難う。歸朝のあかつきにはいづれ御相談に及ぶこともあらう。やる、きつとやつて見せる。」

誠は昂然として窓越しに光る夜空の星を見上げた。

日本マツチ

誠は明治七年十月歸朝した。フランスに留學中、パリーの大學院に招聘せられて、金星經過測檢員となつた關係で——これは特記すべき事で、日本人で外國政府に招かれた最初の事である——星學士ジ・ジャンサンの訪日と行を共にした。

ジャンサンに従つて神戸の諏訪山で金星の觀測を行ひ、これを碑に刻んで山上に立てた。

誠の歸朝記念ともいふべきもので、その天文學上の知識を示す一面として面白い一事である。

しかし、誠の畢生の願ひは天文にあらずして、地上直ちに國力の増強に影響するマツチの製造にあつたことはいふまでもない。

この時、最もよい相談相手となつてくれたのは友人吉井であつた。誠は、吉井の好意によつてその別邸を假工場として、いよくマツチの製造に乗り出すことになつた。

當時彼が苦心をしたのは、マツチの軸木となる白楊樹びやくやうじゆをどこに求めるかといふ事であつた。八方人を派して調査せしめた結果、日光の山中に群生してゐることがわかり、ついで富士山の麓や、信濃の諏訪にも見出され、後には北海道からも良材を求め得て、まづまづ軸木の材料には事欠かぬ見定めがついた。

誠は、かねての研究を實地に生かすべく、渾身の努力を續けた。一本のマツチ——それは見た目にまことにさゝやかな存在である。しかし、軸木の切り揃へ、その乾燥、藥品の調合、

その接着法等、製品としてはすべて始めての事故、その苦心、その努力は並大抵の事ではなかつた。

幼時神童といはれた頭腦に、國富増強の熱意をこめて試作に専念する誠の誠意はこゝに空しからず、試練一年有半にして、遂にほゞ外國製品に劣らぬものを生み出すに至つた。

「吉井君、これを見てくれ給へ。」

快心の笑みをもらして吉井の前に一箇のマッチを示す誠。それを手に取つておしいただく如くしげ／＼と見入る吉井。かつてのバリーでの約諾がこゝに實を結んで、二人の感慨は一入であつた。

いよ／＼大量製産の目安がたつたので、本所柳原町に本工場を建て、新燈社しんとうと名づけ、我が國マッチ製造の始めての業を起したのである。

時は明治もすでに十年となつてゐたが、かつての武士の生活不安の嵐は尙吹きすさび、失業と轉職の苦しみにあへぐ人々の群は巷にみちてゐた。誠はこれ等の人々を進んで工場に迎

へ入れた。彼の義侠心は仕事の能率を考へるよりも、人の苦しみを默視出来なかつたのである。

ところがそれは意外な結果を生んだ。誠の溫情に感激したこれらの人々は、慣れぬ仕事ながらに懸命の働きをした。仕事に熱と誠意のこもる程強いものはない。新燈社の製品見るべきものありと、次第に朝野に認められた。高官がしば／＼視察に来て、國産獎勵舶來驅逐の意氣に拍車をかけた。遂に外國品にまさるとも劣らぬ商品價值のある品が大量に生産されるにいたり、名聲はとみに高まつた。

こゝにおいて誠は齋戒沐浴して一ダースのマッチを謹製した。畏きあたりに献上して御嘉納の榮に浴した時は、まことに天にも上る心地で、工員一同とこの光榮を喜び合つた。

更に第一回内國勸業博覽會に出品して賞牌を受け、支那大陸に向け輸出して大いに聲價を博し、いよ／＼商品としての地歩がすつかりかたまつたのであつた。

再びフランスへ

誠がフランス在留中に目をつけてゐたものに、尙甜菜糖てんさいとうがある。砂糖は、當時日本には生産されず、貴重品の如く珍重せられた。フランスは甜菜の栽培の盛んな所であるから、自然目についたものであらうが、やはりすこしでも輸入品を少くしようといふ國家的の考へであつた事はいふまでもない。

氣候風土が違ふからどうかとあやぶまれたが、とにかくフランスから持ち歸つた甜菜の種をまいて試作し、僅かではあつたが製品を得たので、これを時の大藏卿大隈重信に見せて事業化する可能性がある旨を説いた。大隈卿は大きくうなづいて、

「マッチといひ、これといひ、君の目のつけ所には大いに感服する。マッチの方は既にお上へ献上する程のものになつたのだから、今度はこの甜菜糖の研究をやつてもらはう。早速だが、もう一度フランスへ出かけて、しつかり調べて来てくれ給へ。」
といつて、すぐに誠の海外視察の手続きを下僚に命じた。
かくて誠は、十一年七月、官命を受けて再びフランスへ出かけた。

さて、フランスに着いて調査を始めようとする、すでに有力な日本人で、ヨーロッパ各地をまはつて甜菜糖の調査研究をしてゐる人があることがわかつた。誠は

「マッチの方の研究が、これからだと思つてゐた矢先である。甜菜の方はその人にまかして、自分はやはりマッチの方の研究に専念しよう。」

と、早速この旨を申し送つて、歐洲各國のマッチ業視察といふことに旅行の目的をきりかへた。

その頃スイスにヨンコピングといふ有名なマッチ製造會社があり、その會社で安全マッチを發明したことが評判になつてゐた。誠は手づるを求めてその會社長宛の紹介狀を手にし、一日參觀を申し込んだ。

この種の會社は外來者に對してはなか／＼嚴重で、殊に外國人などは絶対に寄せつけないのだが、日本人と侮つてか、珍しがつてか、快く面接して社長自ら案内に立つた。

日本マッチ界の第一人者と知る由もなく、社長は足早に案内しようとする。誠が機械のわ

きに立つたりすると、社長はげんな顔をして尋ねた。

「あなた、この機械わかりますか。」

「いや、あまりに見事な動き方をしておりますので、何が何やらさっぱりわかりませんが……。」

誠は口をにごしてまたその後にしたがつた。

僅か一時間足らずの見學であつたが、誠の眼はよくこの會社の機械のかなめをとらへ、設備の要點をつかんだ。辭して會社の門を出た時には、すでに歸國後の計畫がいろいろと設計されてゐたのである。

宿望成る

誠は大きな夢をゑがいて歸國した。しかしながら、彼を待つてゐたものは、實に思ひもまうけぬ事であつた。



新燧社の全焼がそれである。一時は呆然として失望落膽したが、持ち前の豪氣と粘りは直ちに勇猛心となつて、「何のこれしきの事に。」と猛然と奮ひ立つた。百方奔走して資金を集め、新知識を織り込んで工場を新設し、新しい機械をすゑ、製法に改良を加へて再出發した。社員を上海・香港に派して販路の進出をはかつた。

世人はやうやくこの業の安全であつて需要の多い事に目をつけ出した。誠は國家的の見地から、この業に志す者のあらはれるのを待つてゐた。したがつて一人でもその志のある者が門をたたくと、喜んでこれを迎へて、あらゆる便宜をあたへてやつた。かくてマツチ製造業が全国に行はれる機運がだん／＼と高まつて行つたのである。

誠は、内地の製品をもつて國內の需要を充たす自信がついたので、その頃輸入マツチの賣りさばきをしてゐた全國の商人を東京に集めて開興商社なるものを組織し、外國製マツチを斥けて日本製品を扱はせることにさせた。

この結果、はじめて外國マツチの輸入を封じ得て、年來の宿望を達することが出來た。彼

がこの業を起してから五年、明治十三年の夏であつた。

雲降る日

國內いたる所にマッチ工場が雨後の筍の如くに續々と出來た。製品は國內にあり餘つて輸出は年一年と増加した。

ところがこゝに、眼前たゞ利のみを追ふ徒輩があらはれて、お話にならぬ粗悪品を大量に生産し、甚だしいのは火のつかぬマッチを輸出する者があるにいたつて、日本マッチの聲價は一舉にして地におちてしまつた。

輸出はばつたりと止つて、日本マッチ業全體は不況のどん底に落ちこんだ。新燧社製品も倉庫にうづ高く積み上げられるばかりで一向に賣りさばきがつかなくなつてしまつた。

製品に自信を持つてゐる誠は、かくてもその製造を止めなかつた。いづれは眞價を認められると、一日もその製造の手をゆるめなかつた。しかしながら資金の運轉がきかないので、石炭の買ひ入れまでとどこほる悲境に立ち至つた。誠は悲壯な覺悟で工場の一部をこはして

かまの中に投げ入れた。

先年の失火の痛手がまだいえてゐない新燧社にとつて、この悲境を乗り切るべくそれはあまりに大きな試練であつた。誠の熱と誠意がやうやく認められて、再び製品が市場に進出した時、既にもう絶対に猶豫してくれない借財の返済期が迫つて來てゐたのである。

二十一年十二月、さむぐと雲降る日であつた。十數年勇奮努力、たゞ男一匹の力できづき上げて來た新燧社は、遂に解散の運命に立ち至つたのである。

誠は孤影空しく故郷金澤に歸つた。

世を終へるまで

傷心の誠にとつて北國の寒さは身にしみた。しかし深々と雪におほはれながらも、毅然として立つ松の緑を見る時、そこに不撓の精神が燃えずにはゐられなかつた。彼は三度マッチの研究に足をふみ入れたのである。

黙々として研究を続けること數年、摺附木軸排列機を製作して特許を得た。女工一人で従

來の十五人以上の能力を發揮するといふので、全國の業者からいたく喜ばれた。

これに力を得た誠は、日本マツチ界草分けたるの名譽のためにも、今一度マツチ製造の業を起さうと思ひ立つた。年すでに五十二歳、こゝを死に場所と大阪に出て工場を建て、名も旭燧舎とつけて、心魂を打ちこんでその經營にあたつた。かたはら常に製法の改良に工夫をこらし、新たにマツチ軸排列機の特許を得た。

三十二年一月、ふとした風邪がもとで急性肺炎となり、大阪大學病院の病床に横たはつた。うはごともマツチの事、工場の事、特許の事をばかり口走りながら、遂に二月八日、五十四歳を一期として百折不撓の生涯を終つた。

大正四年、従五位追贈の恩典にあづかる。ひとへに生前の功勞を思し召されたものと拜せられ、忝けない限りである。



久田佐助

荒れ狂ふ波間に船と運命を共にして従容と死に就いた船長。

船橋の欄干に身を結びつけ四十歳を一期として壯烈な最期を遂げた船長。

あの東海丸船長久田佐助が霧深い津輕の海に死花を咲かせてから早くも四十年である。

大東亞決戦の下、我が海上輸送陣が無敵海軍の勇士とともに或は遙か灼熱の南海に、或は嚴寒北溟の海洋に烈々たる鬪魂を發揮してその任務を遂行しつゝある今この時、切に船長久田佐助の高潔な心事を思ふ。

敵潛艦跳梁の中を身命は軽く任務は重しと挺身して花と散つた幾多の海員は何れも盡忠奉公の誠に生き海員としては正しく久田精神を繼承發現したものである。名の爲に非ず、利の爲に非ず、一意海員道に殉ぜんとする日本精神はかうして脈々と永遠の古より無窮の將來へ傳へられてゆくのだ。

能登内浦の海。遙か東南一帯には白雪をいたゞいた立山連峰を中央に、左に白馬、右に白

山が聳え立ち夕陽に照り映えて崇高そのもので、風ぎ渡つた海は飽く迄も澄んでゐる。山田川の清い流れは村里を抱くやうに屈曲してこの海にそゞぐ。

こゝ鶴川の里に生まれ、この自然に育まれた久田佐助は既に幼い時から海に憧れてゐた。枕の下にきく波の音、鼻をつく磯の香り、高い嶺々と涯しなく展がる海は少年佐助の夢をふくらますばかりであつた。

父なきあと母の手一つで育てられた彼は、母にとつては杖とも柱とも頼まれる身で、母は彼を遠くへ離すことを好まぬのも無理のないことであつた。又平和な漁業の生活は彼の決心をにぶらす事も多かつた。

小學校を卒業後は家業を繼いだ旁ら同村の原勤堂先生に就いて漢學を學んだ。原先生は當時能奥第一の學者として名が高かつた。春の朝、秋の夕べを寸暇をさいて机に向かひ、靜かに讀書し、反省し、思索した。

「よし、これだ。」

借用の漢籍を讀んでゐた彼は、筆をとつて一心に書寫し始めた。

「世ニ舌ヲ嚼ンデ死スルモノアリ、屠腹シテ死スルモノアリ、縊首シテ死スルモノアリ、水ニ投ジテ死スルモノ等アリ。能ク天年ヲ終ヘザルモノ一ニシテ足ラズ。コレ皆氣膽難事ニ處スル能ハズ酸楚痛苦極地ノ以テココニ至ル所以ナリ。大人ノ如キハ然ラズ。一厄一厄ヨリ耐心愈々固ク一難一難ヨリ知識益々開達ス。決シテ屈撓スル所ナク幾何ノ峻急ニモ氣宇縮退ノ形容ヲ顯サズ。」

筆寫は更に續く。

「古人言ハズヤ、禍害ハ幸福ノ大ナル者ト、——世事、己ノ意ノ如クナル者ヲ希望セズシテ己ノ意ノ如クナラザル者ヲ愛スベシ。意ノ如クナラザル者ハ抑々人間終身ノ天賜ナレバ也。」

彼は寫し終ると何回も讀み返した。

「これだ。これを座右の箴としよう。」

餘白に向かつてひと筆で書いた。

「精神一到無不就」

と。生涯を貫いた至誠謹直の人柄はかうして築かれていつた。

明治十六年小學校教員を拜命し、四年程忠實にその職に勵んだのであるが、漸く多年の念願が叶ひ素志貫徹を期して北海道に渡航、函館商船學校に入學したのは彼の二十四歳、明治二十年四月であつた。

妻菊子はその志を勵ましたことは彼にとつて、どんなに心強かつたことか。妻は函館時代に裁縫教師をしその收入によつて彼を學ばせたのである。まことに菊子夫人もまた銃後婦人の鑑であらう。

學生時代は文字通りの苦學力行であつた。醇美な日本男子としての氣魄と壯烈剛勇の精神は此の間にも愈々鍊磨され光を加へたのである。入學當初より級長を命ぜられたのもその人格を認められたからだ。

その頃使用された粗末な本箱の蓋には、菊蘭竹の一本がそれ／＼描かれてゐる。馥郁たる菊花の香り、比ぶべくもない蘭花の品位、竹の虚心にして節を持する、所謂君子烈士の態度を心として常に修養研鑽したのであらう。

函館商船學校は後東京に移轉合併されたので彼は東京商船學校を明治二十六年に卒業したのであるが、船員としても至誠勤勉にして技倆も亦拔群であつた。特に郷里の母親に對しては毎月必ず給料の幾分を送金して老後を慰め孝養の至情を盡した。先輩や知人に對しても多忙の中から常に音信を欠かさず、その安否をたづね、濃やかな人情を示したのであつた。これは殉職一ヶ月前九月二十五日附で郷里の實弟河合氏に宛てた文面である。

「益々御壯健ト遠察大慶。母上様御病氣モ冷氣ニ相成快キ方ニ御座候由喜居候。陳者一昨二十三日午後ヨリ昨日中ハ近來稀ナル暴風雨ニテ其地ハ被害等無之候哉御伺申上候本船ハ一昨二十三日午後五時室蘭ヲ發シ候處港外ハ非常ノ高浪且風吹募リ候ニ付室蘭ニ引返シ昨日午後十時風和ギ出帆今午前九時三十分青森へ着港候。右御通知旁如此御座候 早々。」

では壯烈な殉職の様を記さう。

青函連絡定期船東海丸は多數の船客を乗せ郵便物や貨物を積んで折柄の暴風雨を冒し、夜半に青森港を出帆した。明治三十六年十月二十八日のことである。

津輕海峽特有の濃霧は四邊を蔽ひ、風浪は次第に高まつてゆく。しかも雨は雪となり吹雪と變つて黑白も分かぬ暗い海上を吹きまくつた。

東海丸は頻りに汽笛を鳴らし警戒しながら航行した。かくて明くる朝四時頃には渡島半島矢越岬の沖合、東徑百四十度三十七分北緯四十一度三十七分の位置に、さしかゝつてゐた。

突然右手の吹雪の中から此方をさして突進してくる船があつた。それは室蘭で石炭を満載



してウラジオストックへ向かふロシア汽船プログレス號であつた。

東海丸船長久田佐助は目前に迫るこの危急を避けんとして全力を盡したが既におそかつた。間一髪あはやと思ふ間に大音響とともにロシア汽船の船首は東海丸の船腹を破つてしまつた。海水は見る／＼浸入する。東海丸の船體はぐつと傾いた。

すは一大事。船橋にあつた久田船長は勵聲叱咤全船員を部署に就かせた。五隻のボートは降された。彼は狼狽してわめき叫ぶ船客をなだめながら、片端からボートに分乗させた。この間にも東海丸は刻々と沈んで行つた。

船客も船員も全部ボートに乗り移つた。再度船内を巡視した船長は何度か念を押すやうに

「皆乗つたか。」

「乗りました。」

「一人も残つてゐないな。」

「残つてをりません。」

残つたのは船長たゞ一人である。

「船長早く避難して下さい。早く、早く。」

だが返事はなかつた。一體何をしてゐるのだらう。船員の一人はたまらなくなつて馳せつけた。

「船長、早くボートへ。」

しかし船長は船橋の欄干に身を寄せたまゝ動かうとしなかつた。見れば、彼の身は旗の紐でしつかと欄干に括りつけられてゐる。一同の無事避難を祈りつゝ、沈み行く船と運命を共にしようとする覺悟なのだ。

「船長、私もお供致します。一しよに死なせて下さい。」

船員の感激の叫びである。

船長はおごそかに答へた。

「船と運命をともにするのは船長の義務だ。お前は早く逃げろ。一人でも多く助かつてく

れるのが私に對するお前達の務めではないか。」

威嚴のある聲に船員は思はず、はつとしてボートに身をゆだねた。

「皆よくやつて助かつてくれ。」

東海丸からは、ひつきりなしに汽笛が高鳴つて暗い海上を渡つて行つた。聞く人々は身を切られるやうな思ひであつた。

やがて其の音は聞えなくなつた。東海丸は沈んだのである。最後まで非常汽笛を鳴らし續けた久田船長もろともに。

暗夜と荒天の海上に五隻のボートは木の葉のやうに揺り動かされた。中には波に吞まれてしまつたのもある。しかし百三名の乗客船員中その五十七名は辛うじて助かることが出来たのである。

日露の風雲が愈々急を告げた際に露船プログレス號と衝突し沈没した東海丸の悲報が一度

傳はるや、世は舉げて船長久田佐助の行動に感激した。その鬼神も哭く壯烈無比の最期は國民の士氣を大いに振起したのである。

「日露は遂に衝突した。しかも日本は勝つた。」

とは、當時船長の義烈を歎稱した大隈侯の叫びであつた。

「船長たる者は萬一の場合決死の覺悟がなくてはならない。百人中九十九人迄助かれればあつても自分は自分も生きてゐるかも知れないが、さもなければ歸らぬものと思へ。」

とは久田船長が、かねがねその妻に言ひ聞かせてゐた言葉であつた。東海丸遭難第一の電報を手にした時、妻は早くも夫の死を覺悟し、見舞の客に對しても敢てとり亂した様子を見せず、船客と船員の安否をたづねた。これを聞いた人々は今更のやうに久田船長の立派な精神に感動すると共に、夫を辱めないこの妻の態度をほめたゝへたのである。

菊子未亡人は其の後郷里鶴川で船長の冥福を祈りつゝ靜かに餘生を送り、三年ばかり前に他界された。その貞淑な生活は郷黨の景仰するところであつた。

東海丸沈没

船長助けを辭し死して節を全うす

海内歎稱して弔祭切なり。

謂ふを禁ず、西洋の十字連

日人狂激にして自殺を好むと。

これは當時の新聞に載せられた國民の感歎の聲である。

郷土の生んだ海員中の海員たる久田船長を仰ぎ、その職務に忠實且つ責任感の強き久田精神を相承け相繼いで、海國石川の傳統に生き、決戦下皇國の使命達成に邁進することこそ、郷土青年の義務であらう。久田船長の死が、やがて百の久田を生み、千の久田を生むことを固く信じて疑はない。



高 多 久 兵 衛

朝の繩手に立つ。白山さんからわけられた安原川の消える邊、松籟に明け暮れる濱邊が静まり、早苗の波はるばると打つ石川の野の彼方、加賀の群山は金に紫に輝く。

金澤から西へ二里、耕地整理の村として全國に魁けたここ上安原の田・畠も、五十餘年前までは、歪んだ田・畠が高低きらはす不規律に並び、雑草の生ひ茂る畦は徒らに大きかつた。

水ぬるむ三月から晩秋へ——。高低はげしい田毎に水を取入れる爲に、異常な苦心を拂ひ、うねくした道を汗にまみれながら稲を運んだ。「田を撫で廻す。」この言葉が、しつくりあてはまる程心魂を注ぎ、辛苦して耕し、培ひながら、不規則に並ぶ田區を改正することが、非常に好都合であることを秘かに思ひ、時に話し合つた。

「若し、歩數をもつと廣く、溝も眞直につけることが出来たら。」

「あちらに一畝、こちらに三畝とあるのを一所にまとめるだけでも、大したものだ。」

然し、それには一人や二人の所有田の持寄りでは十分な改正は望めない。村全體の所有田

に互ることが必要であつた。従つて改正の必要を痛感しながらも、實際に改正しようとは少しも思はなかつた。夢にも考へぬ——といふ方が適當かも知れぬ。この村だけでなく、日本全國の田畠は、このやうに極めて不便な状態でありながら、皆申し合はせたやうに改めることをしなかつた。たとへ、小さな田でも、三角畠でも、先祖からのものは絶対にかへることは出来ぬとの、土に對するはげしい感情に、改正費用の負擔、受益の不均等を氣遣ふ心が、からみ合つてゐるからである。然し、そこから一步抜け出し、その尊い土を、もつともつと生かす爲にはどんなことが必要か——田區改正（耕地整理）こそ土を最上に生かし、土に對する報謝の現はれであることを考へる人も稀にはゐた。だが、一村に互り改正を施すには、柔よく人に親しまれ、剛よく百難を突破する、開拓者の蹶起に俟たねばならなかつた。

明治二十年。時の政府は、田畠の區劃改正、土地改良に乗り出すことになつた。岩村石川縣知事は是非この事業を成し遂げようと、縣營で模式的な田區改正を行ひ、その必要と有利を説き、實施を奨めた。然し、縣下一ヶ村として、いや一人として試みる者はなかつた。「一

人のこれを爲す者なし。而も行はれざれば、百年行はれず。」事の困難を早くも見通した知事は「この上は一人の先達、茨の道を切開くの外、手段なし。」と、豫てこの人ありと期待してゐた人、高多久兵衛に意を傳へた。

久兵衛は上安原に生まれた。家は舊藩時代藩主鷹狩の際の御休所になつた家柄で、代々豪農である。幼い時から刻苦して身心を錬り、義の爲、道の爲にはどんな艱苦をもいとほぬ氣概を温良・質素のうちに深く藏した。長じては、村の子供達が殆ど無學なのを慨き、自宅を開放して自ら教鞭をとり、育てること七年、村長となるや他に先んじて學校を建築、一躍模範校とした。又凶年には、冬期間窮民に粥を給し、漬物を頒ち、夏には蚊帳數十張を與へるなど、枚擧に暇ない義舉を秘かに続けた。岩村知事の期待したのも決して偶然ではない。

人生意氣に感ずるとか、誰一人實施する者のない國家的事業に、久兵衛は非難と困難を承知の上で突進することに決心した。役所よりの歸るさ、先人未到の事業完遂への途をあれこれと考へ惑ひながら歩く脚は重かつた。蕭々たる野は暮れ、道もせに老草は茂り、芒を渡る



高多久兵衛(右)田南と見廻り

野分は冷たかつた。その夜、さすが艱苦を意にせぬ久兵衛も殆どまんじりともせぬ夜を明かした。野に出ると、曉闇の空に、太古そのままの姿で、おほらかに鎮まるみ山白山——日々に仰ぐその山をじつと仰いだ。不思議な力が身内に湧いた。激流岩を嘯む溪流のやうに、鋭鋒雲を切る峰のやうに、鋭い氣魄が五體に脈打つた。悠久の昔からこの地を護り、育てます白山さんに酬いないでよいだらうか。悶えは解け、東雲よりさし出る千萬の金箭の如く、力と力が、體よりとび出して来るやうに感じられた。

村人の寄合場で、呐々と久兵衛の語るのを聴く村人の顔に、明らかに不快の色が浮かんだ。最初は柔かに

反對し、遂には猛烈に反抗した。このことのあるのを覺悟してゐた久兵衛は、工事の必要を諄々と説いた。而も得たものはやはり不承諾だつた。久兵衛は人がどんなに土に根強い愛着を持つてゐるかを今更のやうに感じた。然し、考へてみると、この土への愛着があればこそ、時に不毛不作の春秋にもめげず、黙々として鋤を振ふのである。かうした自分の田への愛着を村の土地、國土への愛着に引上げねばならぬことを悟らせることが出来れば、豁然工事の要も悟る筈と更に努力、遂に改正不成功の際の全經費負擔、植付遅延し收穫減少の場合の辨償等四ヶ條を提出、同意を求めた。久兵衛の命がけの誠心は遂に村人を動かした。人々は一意力を併せて工事に當ることを誓つた。

おせんぼう 綿々雪が降つて来る。

おばあさん 綿々雪が降つてゐる。

大戸も小戸も閉めさんせ。

雪に明け、吹雪に暮れる北國の冬は、三月の聲を聞いても去らうとしなかつた。芽ぐむ春

を待ちかねた村の子供達は、遊びにもあきると雪垣越に外を見ながら歌ひ合つた。

早春雪の消えるのも待たれず、雪をおかして六十丁歩に互る測量をはじめた。是が非でも、田植時までには工事を終へなければ、今秋の收穫は望めぬからである。測量の器具とてない當時のこと封建時代の檢地そのままに、竿や綱を用ひた。従つてそこにも人知れぬ苦勞がかすかずあつた。だが、人々が喜んで工事を始めてくれるので、久兵衛は夜も寝られぬ位喜び、仕事の辛さも一向に感じなかつた。その中に、早くも改正に反對する者が現はれた。偏見、固陋な二三の者が、夜中秘かに測量竿を折り、區劃を壊すなどはやさしい方であつた。一番工事が始められた。働ける程の村人は一人残らず、文字通り朝早くから夜遅くまで働いた。整地、運搬、溝づくり、道路づくりと、ほんとに目のまはる日々であつた。工事に對する中傷、妨害はやはり絶えず、深夜の欠兵衛宅に石を投げ、戸をたゝいて罵り、時には工事の中止を迫られたことも二、三度ではなかつた。しかし、どのやうな悪評、罵言にも久兵衛はたじろがなかつた。胸中國家の事業が大きく息吹き、負けじ魂が湧き立つた。困難にぶつかればぶつか

る程、心の餘裕を求めては山を仰いだ。大きな大きな山の心を。

かうして、幾度か暗礁に乗りあげかゝつた工事も、その年の六月見事に完成した。しかし、既に田植時期を失し、竣工を喜ぶ前に、今秋の不作を豫想する人々の苦々しい顔を見なければならなかつた。工事の大部分は豫定以上にはかどつたのであるが、一部難工事の爲に竣工が遅れたのである。時もよし、縣農事試験場の生徒が援兵として繰り出された。整然と區切られた美田、田に添うて流れる小川。縦横に走る野路を稲苗はとぶやうに運ばれた。漣の立つ水田が早苗田と變り、夕映の田毎に蛙の聲が賑はつた。

「み山から戴くこの水が無駄に使ふことなく、先祖様の生きていらつしやる土をみんな生かした。どうやら、これで先祖様への御恩返しに幾分か出来たといふものだ。」

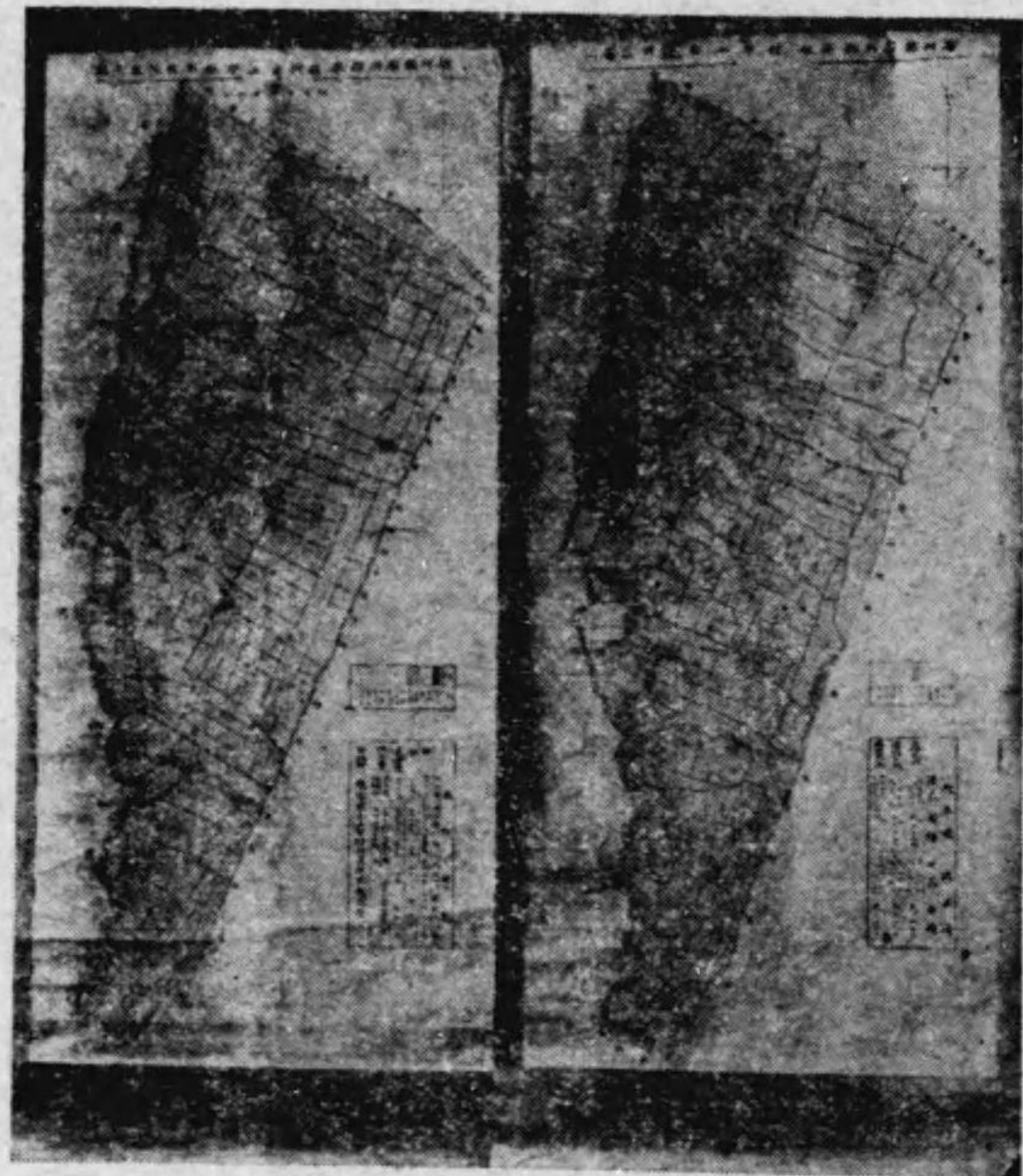
蒼茫と暮れ行く田に、久兵衛は無量の思ひで立ちつくした。植付の遅れた田圃は、順調に發育した。灌漑、草取、肥料、運搬……何から何まで整理前よりも格段に便利に行はれた。その上、他村の稲が虫害の爲に不作をかこつたのに、此處は虫害も極少く豊穰の秋を迎へ、

人々はあらためて、先見の明と、不屈の心に生き通した久兵衛をみた。

全国で最初の耕地整理

——田區改正——は、かうして郷土の開拓者の手によつてなされた。一人よく一郷を率ゐ、一隅よく天下を照らすものであつた。

耕地整理成功のことが、一度全国に傳はるや、見學に来る者が相踵いだ。その



耕地整理前後の比較圖

事を計畫、實施する村が多かつた。やがて政府は「耕地整理法」を公布大いに獎勵した。いたる所へ久兵衛は、指導に招かれた。千葉・宮城・京都……と、その足跡を全國に印した。如輪棒に似た二尺五寸の鐵杖を手に、草鞋ばきの粗服で、身輕に出掛ける。鐵杖を土中に突き差し、炯眼よく土性を知り、工事の難易を洞察した。工事の指導と一緒に、その根柢にある土と川への感謝、報恩を説いてやまなかつた。

明治二十七・八年戰役のときである。赤十字社社員募集打合會に、彼は粗服のまま出席した。或人が、これを見て非難すると、久兵衛は「今國家多難、朝野を擧げて國事に盡くすの秋なり、服裝の事豈顧みるの暇あらんや。」と、言つた。並居る人々は痛く感じ、知事亦車を止めて徒歩されたといふ。

かうして、耕地整理のことだけでなく、各種の公職に任じて晝夜を忘れ、多忙の中からも、技師、實際家を招いて村人と共に農事を聞き、品評會を開いて、作物の改良に資するなど終

整地を見て驚き、その努力を聞いて讚嘆し、急いで工始一貫一日の如く努めた。

明治三十五年、久兵衛が農事に盡くした數々の功勞が、長くも天聽に達し、勅定の藍綬褒章を賜はつた。その時病床にあつた久兵衛の萬一を慮つた上京中の知事は、賜はつた藍綬褒章を直ちに縣廳に急送、郡役所より久兵衛家へ直送された。久兵衛は皇恩の厚きに感激、伏して御禮申し上げると共に、知事以下、人の世の恵に一層の奮勵を誓つたのである。三十九年再び病に臥し、四十一年、五十七歳で長逝した。

白嶺を仰ぎ、海鳴りを聞く所、土に生き貫いた聖者の魂は今に生きてゐる。世に盡くしながら、世に知られることをおそれたこの土の人の業績は、嘗て田區改正に協力した清水善太郎の嗣子によつて「追頌碑」に顯彰され、碑を前にして建つ交和館は、永遠にその風格を物語るのである。



小野三太郎

小立野臺地を挟む犀川と浅野川とが、長い年月互に臺地を浸蝕し合ひ、危ふく道幅だけを
残す湯涌谷往來——牛首のあたり、東は五十米の斷崖下に浅野川を見、西は犀川の清流を隔
て、三小牛山を望むところ、青田にとりまかれて建つてゐる新しく明かるい數棟の平屋建を
見ることが出来る。

この建物内には、貧しい上に身寄りのないあはれな老人、幼くして兩親に別れ、引き取ら
れ先のないかはいさうな子供等、二百餘人が收容せられてゐる。

暖い日だまりでゆつくり針を運ぶ老婆、不自由な手先で網をすく老翁、額にきざまれたし
わは深い。しかしそのまなざしは感謝の光りを宿し、安らかな喜びに満ちてゐる。無心に遊
んでゐる子供等の姿にも何等の暗いかげがない。

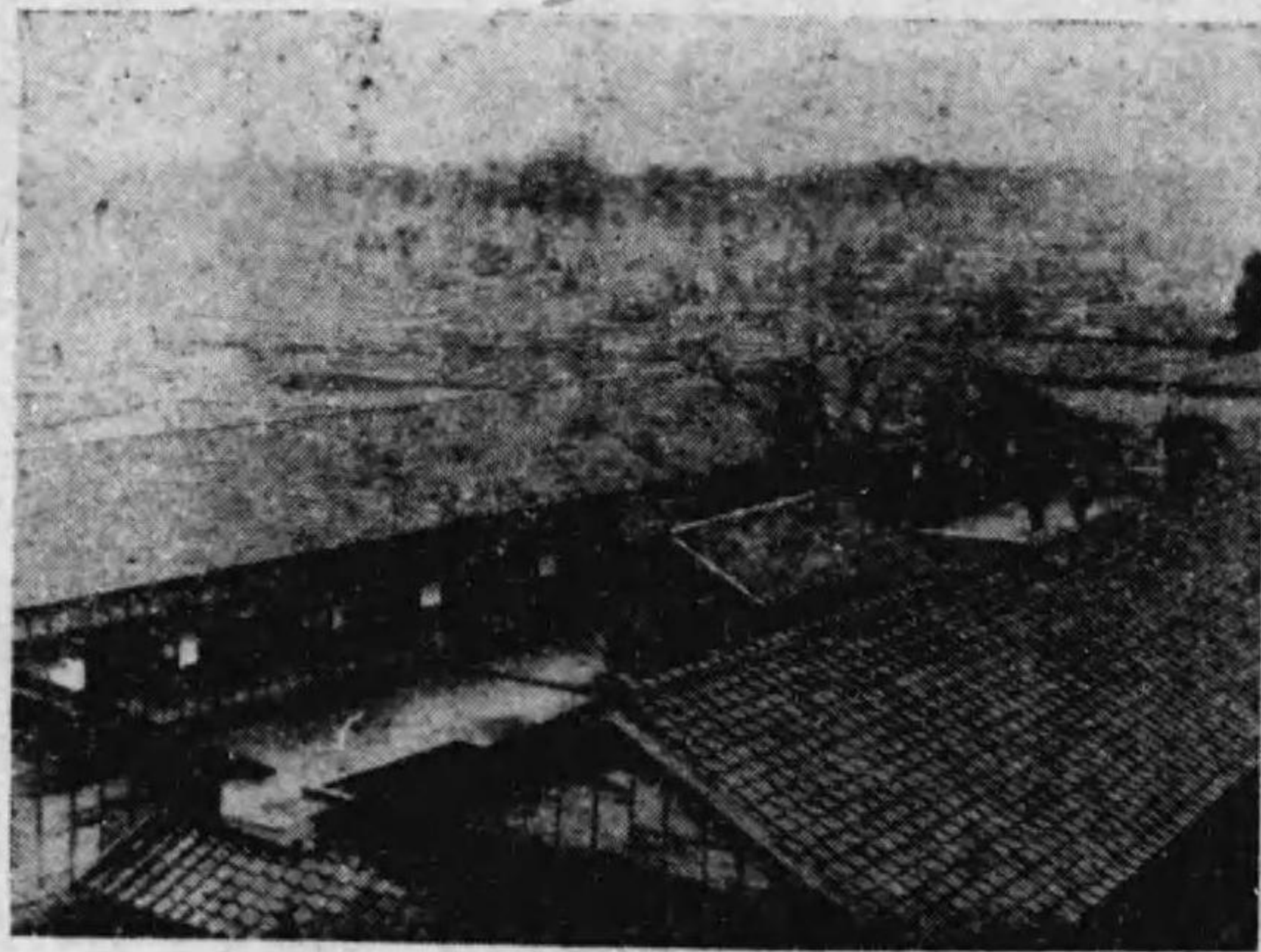
こゝを訪れる程の者は、人の世に情がどんなに大切なものであるかをしみじみと感じると
ともに、この業をこゝまで押し進めた人の面影をしのばすにはゐられないであらう。

小野太三郎が、始めてこの慈善院を開いたのは、元治元年、今から凡そ八十年前のことだ

ある。

太三郎は幼少の時、きかぬ氣の腕白小僧で
あつた。近所の子供等は彼の姿を見かけると
「それ、亂暴者が來た。」と、さゝやき合つて
は影をひそめてしまふのが常であつた。終日
外へ出歩き、遊びにふけり、およそ後年慈善
事業をおこす人とはたうてい思はれない少年
時代を過したのであつたが、或る時不思議に
一轉機が劃された。

それは一冊の本「忠臣蔵」であつた。今ま
で度々讀んでをり、別に珍しくもない本であ



院 全 景

つたが、そのはじめに「嘉肴ありと雖も食せざれば其の味を知らず……。」とある一節がふと彼の心をとらへた。それは實に不思議なことであつた。今まで誰の忠言も耳へ入れぬ太三郎であつたが、この一句が深い影像となつて心にやきつけられた。沈思數日、とざされた狭霧がはれてはるかな行く手があらはれたやうに、太三郎は我が心のありかを今はつきりみつめることが出来た。この時から太三郎の行は實に百八十度の轉回をしたのである。「四書經典餘師」を買ひ求めたのはそれから間もなくのことであつた。心を潜め辛苦して誦讀する事一再、次第に人倫の大道に通じ、遂に「書を讀むこと萬卷なるは、一の實踐躬行に如かず。」と考へ、實行に移すところに學問の眞價があるのだとして新しく第一步をふみ出した。あまりにもかはつた太三郎の行動に人々は目をみはつた。

その頃の事である。或る日町を通ると、一匹の大きな龜を圍んで大勢の人がわい／＼騒いでゐた。見ると、龜にいろ／＼の藝をさせる見せ物である。一つの藝が終る毎にまはりから感歎の聲と共にばら／＼と金が投げ與へられた。

ちやうどその時群衆の傍、地上にすわつて憐みを乞ふ一人の老人があつた。破れた着物をまとひ、やせこけた頬、手足、見るもあはれな姿である。しかしこゝに集つた人の誰一人としてこの老人に情をかける者なく、かへつてきたないものを見たとはかり唾をはきかける者さへあつた。

「龜にお金を投げ與へる人が、どうしてこのあはれな老人に施しをしないのだらうか。」

太三郎はじつと考へこんだ。先哲の言行がひし／＼と胸に浮かび上つた。

「どうあつても、このやうな氣の毒な人を救はねばならない。」

唯一筋茨の道を突き進むことを心に誓つた。

おそろしい凶年が來た。——元治元年——穂はふくらまず、雜穀は實らず、その上惡疫が流行したため、窮民が路頭にあふれた。

當時太三郎は金澤の中堀川町に古着商を営み、細々ながら一家を支へてゐたが、この有様

を見て、どうしてもだまつてゐることが出来なかつた。豊かでもない蓄へを惜し氣もなく投じて食を求めて與へ、自宅を開放して家のない人々に憩ひを與へた。窮民救済の温い慈悲の手は、かうしてさしのべられたのであつた。

間もなく世は明治となつた。舊藩時代、座頭座といつて盲人が保護せられてあつたのが廢せられて、彼等はたちまち世の荒波にたゞよはされる運命に立ち至つた。見かねた太三郎は八方工面して新たに家屋一棟を買ひ入れ、盲人二十餘人を收容して之を救つたのであつた。ところが殆ど時を同じうして數百人の窮民を養つてゐた藩經營の撫育所もまた廢せられたので、あたかも堰をきられた水のやうに憐みを乞ふ者が巷にみちた。

そればかりではない。かつての武士の中には、幕末から維新へかけての大渦の中にまきこまれ、たちまちに自活の道を失ひ、遂に節を屈して太三郎のもとに救ひを求めざる者も少からずあらはれるやうになつた。

これらの人ををさめるには到底今までの規模では應じきれないので、こゝに私財四百五十餘圓をなげうつて、さらに六棟の家を購ひ、出來得るかぎりこれを引き取り、また、力の及ぶかぎりこれ等の人々のためにつくした。

これだけの人人を收容すれば、三度々々の食事の心配だけでも並大抵のものではない。しかも難民窮民の事であるから病人の絶え間がなく、心のひがみから何でもない事にあらそひを生じ易い。この間にたつて、心を致し身を勞し、それこそ文字通り不眠不休の活動が續けられたのであつた。

小野は變り者だ、いや大山師だなどと、世間のうはさは、必ずしも太三郎に味方するものではなかつた。なる程一片の報酬があるわけでなく、有力な後援者がゐるわけではない。悉く私財をなげうち、身を粉にしての仕事である。世の常識をもつてすれば、かういはれるのも無理がなかつた。

たゞ一人、彼の妻はよく彼の心を知り、彼のこの業を助け、多くの人々の世話にあたつて

愚痴一つこぼさなかつた。

「お前が居ればこそ……。」

太三郎は時々かういつてこの妻に感謝した。

彼の大慈悲心はまことに春日の如く窮民の上に及び、その鐵石心は金剛不壞の力をもつて遂に素志を貫き通し、やうやく世人もこれに尊敬の心を起し、この事業に後援を惜しまぬ者もあらはれるやうになつた。思へば長い苦難の道であつた。

元治元年の飢饉以來、四十餘年の長きにわたつて收容した老幼男女の窮民の數は、實に一萬の多きに上る。その大半は瘋癲・白痴・老衰・廢疾者であり、一半は鰥寡孤獨の徒である。これらにそれぞれ能力に應じて作業を與へて安住感を付與し、少年にはその性情を見定めて將來の計をたて、教育するを怠らなかつた。現にこの院を出て有爲の青年となつて活躍してゐるものが多數ある事を思へば、まことに徳は孤ならずの感を深くするものである。

太三郎のためまぬ善行は、遂に上聞に達して、明治十八年、藍綬褒章を賜ふの恩典に浴した。太三郎は 聖恩のかたじけなさに、文字通り感泣してはるかに東方を伏し拜んだ。粉骨碎身、一生の事業、いや子々孫々の事業としてこの光榮をけがすまいと、かたくかたく心に誓つたのであつた。



石田虎松

尼港のバルチザン襲撃に、壯烈な最期をとげた石田虎松領事は、明治七年八月廿一日、能美郡白江村字打越（現小松市白江町）に生まれた。

父は五三郎、母はきた子といつた。八つのとき小松町の母方の家に寄寓して小學校に通ひ、卒業すると更に金澤市の尋常中學北陸英和學校に學んだ。同校二年を修了すると一先づ歸郷したが、家にあつても機會さへあればもつと勉學したいと望んでゐた。

たまたま東京駿河臺のニコライ教會で神學生を募集した。虎松の學友二三は早速應じて上京した。これを知つた虎松は、今は一刻も猶豫が出来ないと思つた。虎松は自分の力でどうにか旅費を工面して、憧れの東京に出發した。即刻神學校に入り、公費生となつて専ら露語を研究した。

かうして研鑽怠りなかつた中に、はしなくも一事件がもちあがつた。虎松等の住んでゐる男子部寄宿舎が、女學校舎と裏合はせに建てられてゐた爲に、何かと男女の接近が風評せられた。これを知つた純朴な虎松等數名の學生は、

「かゝる軟弱行爲が、修學途上の青少年にあるとは正に唾棄すべきだ。まして將來指導者の地位につかうとする神學生にあつて、この風評を生むとは、神の神聖を汚すものである。よろしく排撃すべし。」

と、悲憤慷慨、友人長崎、磯久、加藤等と風紀革新を叫んで立ち上つたが、容れられず、とうとう明治二十九年六月連袂退校してしまつた。正義の青年、虎松の面目躍如たるものがあつた。

勢の赴くところかうして斷然公費生の特權を捨てたものゝ、翌日よりはたと當惑してしまつた。自分で生活の方途を樹てなければならぬ。止むなく、間借して苦學することにし、朝は牛乳配達に、晝は製本屋の紙折を手傳つて糊口の費を得た。そのうち、つでを得て遞信省の通信局員になつたが、これは集配人の上役で、月給は七圓ばかり、當時の生活には餘りあるものであつた。ところが、晝夜勤務の爲、夜業をすまして歸宿すると、ぐつと疲れが出て、少しも勉強することが出来ない。さすがの虎松も閉口して、暫くで退職、再びもとの自

由勞働に服しつゝ、諸種の學校の校外生となつて奮勵を續けた。困窮がひし／＼と身に迫つた。一日二食としても尙足りなく遂には一食で我慢するといふ日が續いた。しかし彼の意氣は毫も挫けなかつた。

やがて明治三十一年二月、日本切抜通信社檢閲係になつた。この頃元ニコライ漢文學教師野中貞藏の紹介によつて、代議士藏原氏に知られた。

明治三十一年九月、永い苦闘の生活に別れを告げて、外交官への輝かしい一步を踏み出したのである。それは外務省留學生に見事合格し、浦潮斯德留學と決つたのである。横濱からの虎松の鹿島立ちは、常人の域を脱したものであつた。その身邊わづかに貧弱な行李一個、しかも下等の船室に悠々とをさまつて些かも苦しなかつた。この行に當り藏原氏は保證人となり何くれとなく世話をしてくれたのである。

浦潮斯德に着いた虎松は、同志の清水氏と二人、貿易事務官として駐在してゐた二橋謙氏の監督の下に露語の研究をすることになつた。學校もない爲、露國陸軍大佐ブリツクの家へ

預けられ修學した。その中に東洋語學校が設置されたので、これに轉じ、三十五年の始めには漸く外務省書記生として在勤するやうになつた。

一人前になつた虎松は郷里に残した母への送金を常に心懸けてゐたのではあるが、元來無慾恬淡な彼は、人が訪ねて來ると大いに優待し、又急を訴へる者があれば財囊の底を拂つても意としない有様で、母への送金は思ふにまかせなかつた。

この頃仲間の人達に髭を蓄へることが流行した。虎松の髭は長く伸びて下向するので風彩は頗る昂らないものがあつた。それで何時も笑ひの種を蒔いた。中には親切に取り拂ひを奨める者さへあつたのである。だが彼はこの冷笑の中にあつてもにこにことしてひるむ所がなかつた。その中一々悠然と練り上げた威勢のよい髭を示した。昨日に變る立派な髭に一同驚異の眼を放つた。がその夜半の事である。突然静けさを破つて悲鳴の聲が起つた。何事かと飛び起きた人々が、駈けつけて見ると、虎松は頬をなで乍ら泣かんばかりにしてうろろしてゐる。事情を聞いた一同は、啞然として開いた口が塞がらなかつた。彼は日頃の惡名を挽

回する爲、宵の中にアラビヤゴムを用ひて髭を整へたのであつた。それが固まつて針のやうになり、無意識に顔を撫でたとき、頬を突き刺したのである。

この話はいつしか廣く傳はり、官民の間に楽しい雰圍氣を醸し出し、互に胸襟を披いて語るといつた思はぬ貢献をしたのである。彼の人柄はすでに若さを脱し圓熟を示してゐたのである。

日露の役もをさまつた明治四十三年七月、露國の首都モスコに轉任となつた。當時の領事館は建物も小さく、在留民も僅かに二十名にすぎなかつた。

虎松の磊落恬淡な性格は、こゝでも本野大使に愛された。寫眞に興味をもち始めた彼は大使館にゆくと、大使と四階の暗室に入つてその指導を受けた。もともと繪畫にも心のあつただけに寫眞の術も長足の進歩を見せて、油寫眞、ゴム寫眞にまで熟達したのである。

在留民間でも、彼の氣のおけない態度は前後になく受けがよく、日夕會合して語り合ふは勿論、閑を見ては運動又は遠足行をした。



石田虎松恩人
藏原氏を歓待す

虎松がモスコに在勤中、スエーデン萬國議員會議があつた。日本議會を代表して藏原氏等が指名されて出張したのである。虎松は早速招かれていつた。彼は藏原氏一行に絶えず附いてゐて、外國生活の不便を取り除くとともに、種々説明の勞を怠らなかつた。

一日強ひて藏原氏等を官舎に迎へて、自ら割烹の腕をふるひ、全力をこめて優待したのである。この事は、日頃の藏原氏の恩義に報いんとするに發して、延いて邦家の經費節約の細事にも心を配つたものである。その温情の誠意に一行の人々も目をうるます程であつた。

藏原氏は後々までも

「情誼の變らない、しかも言行一致の石田氏は、當今得難い外交官である。」と、述懐してゐたのである。

大正六年六月、虎松はニコライエフスク（尼港）在勤となつた。翌七年副領事に任ぜられた。

この頃露國は革命政府の支配する所となり、シベリヤ方面一帯は政情頗る不穩を極めてゐた。たまたま新政府の命を奉ずると稱して集合せる不逞の一團バルチザンは各地を襲撃して秩序を破壊し掠奪行爲を逞うしてゐた。

大正八年の十月下旬、すでに黒龍江は結氷し、舟運の杜絶を見るや、バルチザンは漸次尼港周邊に近迫してゐたのである。こゝへて九年一月に及んで、形勢は俄然急を告げるに至つた。彼は政府に居留民保護の救援を乞ふとともに、同地守備隊長石川少佐と種々對策に苦心した。バルチザンの首魁は、始め我が軍に講和を申込んだ。我が方は彼の言を信じ居留民の安全

を保證する事を約して入市を許した。かくして事なく尼港に入つたバルチザンは、我が方の警備手薄を察知するや次第にその野望を露骨にし先づ我が軍と同志的な尼港露國自衛軍を解散せしめ、武器を取りあげ、悉く獄に投じてしまつた。

かくして三月十一日、敵の革命記念日に當り、石川守備隊長に、日本軍の武器彈藥を十二日午前八時までに全部提出する事を要求し、若し承諾なければ、武力に訴へてもと揚言したのである。事此處に至る。總て平和に處理せんとした我が方の隱忍努力も今や水泡に歸し、石川隊長は最後の斷案を下し、十二日夜半、敵の機先を制して、バルチザンの本部を襲撃した。猛烈な市街戦が展開し、一時我に有利な状態であつたが、夜明けとともに暴徒はその數を加へ、我は隊長始め多數の死傷者を出し、じり／＼と後退、遂に本部と領事館に籠城するに至つた。

これと同時に武器なき居留民は應戦するに術なく、鬼畜の如き暴徒の手にかゝつて無慘なる最期を遂げたのである。

虎松は、バルチザン暴徒に一片の良心あらばと、しばしば露臺に現はれ、銃丸飛び交ふ中に嚴然と立つて、

「人道を知るならば、銃撃を中止せよ。武装しない居留民の安全を圖れ。」と、呼號したが、何らの反應を見せなかつた。

危機は刻々迫つた。市街の猛炎は領事館を包んだ。折から難を逃れて領事館に投じてゐた同胞四十餘名も、すでに最期を覺悟した。虎松は自ら禮裝するとともに、家族にも晴衣をつけさせた。そして居合はせた海軍少佐と、うやうやしく御眞影に奉拜をとげ、ついで重要書類を悉く焼いた。今は心靜かに、同胞たちに別れの挨拶をした。一切は終つたのだ。用意の清酒をもち出すと、少佐と親しく別離の盃を交はした。

この時、物凄い破壊の音を縫つて、續けざまに起る銃聲三發。これぞ夫人が愛兒虎夫（三つ）、綾子（七つ）と潔く自決した合圖であつた。

じつと聽き入つた彼は、海軍少佐と顔を見合はせにつこと背いて従容猛炎に投じたのであ



葬 式

る。時に齡四十七、夫人は三十四であつた。

夫人は仙臺の儒者沼部愛之助氏の四女、同情心厚く夫につかへて柔順、婦徳にかけるところがなかつた。

長女芳子（十二）は東京に祖母と暮してゐた爲に難を免れた。

この報一度故國に傳はるや、虎松夫妻の壯烈なる死を悼むと同時に遺兒芳子への同情は全國より翕然として集つた。

かしこくも 聖恩洪大、三月十二日虎松を領事に任じ、正七位に叙せられ、更に勳六等單光旭日章を賜はつた。更に夫人には勳六等寶冠章を授け



高 峰 讓 吉

られて夫妻の功を永く嘉し給うたのである。

紐育市外ウッドローン墓地は、金澤が世界に誇る一代の俊英高峰讓吉博士が、其の豪華健闘の生涯を終つて、今は靜かに祖國の夢を見る所である。墓地には淡紫のライラックの花が、天才的科學者の光輝ある永い生涯の歴史を、今尙讃へつゝ咲き匂つてゐるのである。

理化學の途へ

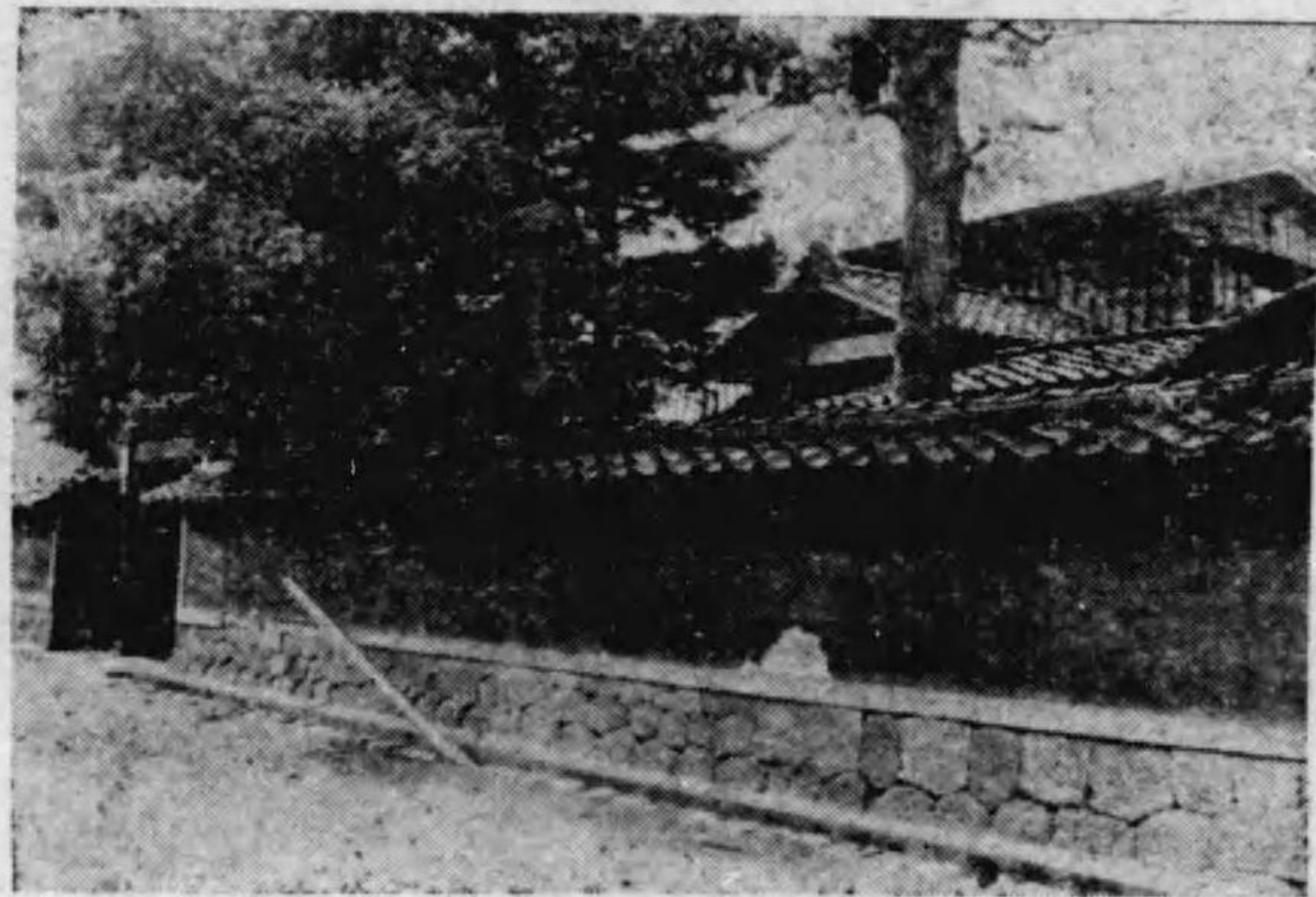
かの米提督ペルリが神奈川沖に投錨、再度開港を迫り、遂に和親條約を締結したのが安政元年であつた。この年十一月三日高峰讓吉は、高岡市御馬出町に生まれた。

父精一は前田侯の典醫として有名であつたばかりでなく、又化學者として非凡な才能をもつてゐた。この父の血を受け繼いだ讓吉が幼少の頃からその將來を囑目されたのはいふまでもない。讓吉は生まれると間もなく父と共に金澤に移り、梅本町の自宅から藩の學校に通ふやうになつた。

年十二歳、加賀藩から選拔された十數人の青年と肩を並べ、當時少年達の憧れの地である長崎への留學を命ぜられたのである。

かくて青雲の志に燃える少年讓吉は、先づポルトガル領事ローロの家に寄寓し、語學の研究に没頭した。一日長崎を訪れた加賀藩の上役達は讓吉の語學の進歩に驚嘆し、「麒麟兒後日必ず成すあるであらう。」と賞讃の辭を惜しまなかつた。

明治元年、長崎留學を経た讓吉は、父祖の醫業を繼ぐべく上阪した。緒方塾から大阪醫學校に、更に大阪舎密學校へと進んだ讓吉は、何時しか初志の醫學を捨て理化學に興味を覚え初めてゐたのである。明治六年、大阪に別れを告げて上京した讓吉は、工部大學（今の東大工學部應用化學科）に入つた。年漸く二十歳であつた。



金澤市梅本町の舊邸

天才の閃き

自治寮の窓から今日も讓吉は明かるく澄んだ大空を眺めてゐた。目に沁む様な蒼空には軽い白雲が浮いて流れて行く。黙然とそれを見つめ乍ら讓吉は先刻から、否昨日も一昨日も、この雲の様に軽々と空に浮き上る輕氣球のことを考へてゐたのである。

明治十年薩南健兒の全線的攻勢に包圍された熊本城に、外部からどうして連絡を圖るかが、天下の人々の注目するところであつた。當時の陸軍省はこの連絡に使用すべく工部大學生に對して、輕氣球の製作を懇望して來たのである。若い大學生達は晝夜兼行でその完成を計つたが、努力の甲斐もなく皆失敗に歸してしまつた。かかる折、黙々と考へ込んで居た讓吉の頭にふと新しい妙案が閃めいて來た。明かるい表情で自治寮を出た讓吉は、都下の大きな提灯屋に一種の紙製氣球を作らせた。この氣球に水素ガスを充たして大空に放たうとしたのである。多數の學友達に固唾を呑む中にこの大きな輕氣球は、折からの風に誘はれて、ゆる／＼眞青な午の空に上つて行つた。學友達の拍手と喝采は何時までも止まなかつた。然し



高嶺讓吉輕氣球
と試製す

熊本城はそれ以前谷村計介の決死の苦心によつて既に連絡が取れ、彼の新考案による輕氣球は残念ながら利用されなかつたが、この氣球の發明は學徒讓吉の名を人々の胸裡に深く刻み込んだのである。

科學の實用化

明治十三年懐かしの學生生活に限りない思ひ出を残して學窓を巣立つた讓吉は、翌年選抜されて工部省から英國留學を命ぜられた。グラスゴー大學とアンデルソニヤン大學は讓吉が異郷最初の學舎であつた。

意義ある滯英三ヶ年。合衆國を経て久し振りに祖國に歸朝した讓吉の眉宇には、輝かしい研究努力の影が深く刻まれてゐた。

生きた新知識を研鑽した讓吉は先づ日本固有の原料を工業に應用することを極力力説し、やがて農商務省に入ると、和紙の製造と清酒の醸造及び藍の製造等に着手し始めたのである。讓吉の科學的企業的第一步である人造肥料は明治十七年、北米ニューオルレ안의萬國工業博覽會に出席した際の土産であつた。當時讓吉の持ち歸つたこの人造肥料は冷笑視されるのみであつた。然し讓吉の信念と熱心とは遂にその奇功を人々に示し、明治二十年澁澤・益田等の人達の協力のもとに、東京人造肥料會社が創立されたのである。今日かくも盛んな我が國の人造肥料は實に讓吉先覺の賜である。

讓吉は一方で劃期的大事業を興しながら更に化學の研究にも努力を傾注した。即ち自費で製藥所を設け、ソーダ製造の廢物からコバルトの採集に成功し、又その一部を利用して防臭劑デオデスを造り、一種の防火塗料にも成功した。

讓吉が多年の宿望であつた清酒の醸造法も當時既に成り、米國の特許をさへ得てゐたのである。

かうして僅々四ヶ年餘りに、讓吉が學界に邦家に貢獻した業績は實に偉大なものであつた。

高峰式醸造法

肥料會社が新興日本の尖端産業として發足してから三年。讓吉は俄に渡米することになつた。それは北米の有名な酒造會社で讓吉が曩に特許を得た醸造法を採用することとなり、「博士の科學と技術とに俟つ。」との申出があつたからである。

自己の考案による醸造法を國外に於て發展普及せしめ得る機會を得たことは、當時としては實に千載一遇の快事であつた。

明治二十三年高峰博士は内助の佳人、キャロライン夫人と二人の令息を伴つて再度渡米の途についた。

讓吉獨特の高峰式醸造法最初のテストは、ヒニツク醸造場で行はれたが、その成績の上乗だつたのはいふまでもない。その特長とする所はモルトを少しも使はず、日本糀即ち高峰式

元糶を以つて玉蜀黍を材料とし、立派なアルコールを製造するのである。第二回の實驗はピオリアにあるウキスキー・トラストの大醸造會社で行はれた。この會社は實に北米醸造業の八九分までを占めてゐる大會社である。優秀な外人技師の目前で行はれたその實驗は、此處でも更に好成績を収め、會社は即座に高峰式醸造法の採用を決定したのである。讓吉の愉快思ふべしである。すでに讓吉の名は世界に喧傳せられるにいたつた。

その後讓吉は次第にこの小規模な實驗から大規模な醸造に努力し、幾多の苦難を経て三年後には實に日産五六百石といふ醸造能率を發揮する様になつた。

しかし程なく讓吉の方法に對して意外な方面から反撃を受けたのである。

高峰式醸造法の特長とする所はモルトを使用せぬことである。讓吉に對する攻撃は實にモルト業者と其の職工達であつた。

受難は重なるで、讓吉がモルト業者の迫害に悩む時、天は苛酷にも高峰式醸造工場を一夜にして灰燼に歸せしめた。然し彼の不屈の闘志はいささかも挫けず、工場はやがて新しく建

設され力強く活動し始めた。噫、しかし萬事休すの最悪の事情に當面することになつた。トラスト會社内起つた紛争は遂に會社トラストを瓦解させてしまつたのである。渡米以來數ヶ年、苦心經營荆棘の途を異郷に歩んだ高峰醸造法は、かうして一大頓挫に直面してしまつた。困難に困難を重ね、數へ切れない程の辛苦を嘗めてここまで到達しつゝ、遂に一切を水泡に歸せしめねばならなかつた讓吉の心中、察するに餘りあるのである。

偉大なる發明

過去數年に互つて努力した醸造法の一大蹉跌も讓吉をして徒に異郷に失意を嘆ぜしめなかつた。讓吉の研究する所、それは人造肥料や醸造法の化學的開發だけではなかつた。その姓をつけた消化藥タカヂアスターゼの發見こそは讓吉の名を一躍世界的ならしめたものである。

元來讓吉の醸造法は日本糶にひそむ消化素であるヂアスターゼを働かせて、アルコール酸酵を起させようとするのであるから、讓吉は當初から此のヂアスターゼに多大の關心を有し



てゐたのである。そして遂にこのヂアスターゼの澱粉を糖化させる作用に着眼して、世界的消化薬タカヂアスターゼを発見したのである。タカヂアスターゼは各國の醫學界にその効果を認められ、やがて醫藥材料として汎く使用されるやうになつた。讓吉の熾烈なる研究心はうむことなく、貧困と戦ひながらも、次々に偉大な發明發見を重ねていつた。タカヂアスターゼ發見について間もなく新しいグリセリン復原法の成功を見、更にアドリナリンの發明へと進展して行つたのである。

アドリナリンといふのは動物の副腎から作られたもので、血壓増加と止血的作用を有する爲、臨床醫學上

の應用範圍頗る廣く内科外科は勿論、産婦人科、眼科、皮膚科等實に廣範圍に使用され、治療界に驚異的な光明を點じたものである。「アドリナリン無くては近代醫學無し。」とまで賞讃されたこの發明こそ、世界學界が久しく翹望してゐた大發明だつたのである。

偉業を遂げて

「外國の材料に就いては外人が研究するから別に其の後を追ふ必要はない。唯日本固有の材料に就いて研究することは同じ發明するにも、それは日本の國益になることを忘れてはならない。日本を名實共に一等國にするには國産品の優秀を生むにある。」讓吉博士は常にさう語つて居た。

今や博士は偉業の大半をなし遂げ、所謂功なり名遂げたのである。晩年の博士は米國に於ける特許辨理士となつて手腕を振つたのみでなく、高峰化學研究所を年毎に擴大して故國から少壯氣鋭の化學者を招き研究せしめ、或は歸國するや理化學研究所の設立を提唱し、ニューヨークに日本人俱樂部を建設するなど博士の偉業は頗る多かつたのである。

博士は一面日米の圓滿なる國交關係に努力され、何時しか兩國人より無冠の大使と尊稱されてゐたのであつた。

大正十一年七月二十二日博士は、遙かに祖國を偲びつゝ其の偉大なる生涯の幕を閉ぢた。工學藥學兩博士の學位を授けられ、大正二年帝國學士院會員に列せられ、大正十一年正四位勳三等に昇叙された博士の一生は、實に奮闘努力の生涯であつた。

博士逝きて二十餘年、彼が残した數々の偉業は今尙國土の上に絢爛と科學の花を咲かせてゐるのである。



上 杉 慎 吉

三月も末だといふのに、外はからつ風が吹いてつめたかつた。書齋つゞきの部屋を病室にあてて、博士は臥してゐた。今日はいつになく元気な博士である。傍の門下生たちに話しかけてゐた。黙つてをられないのである。

「わしは他の學者とちがつて、大學で學生に講義したり、或は著書を出して、學者たちや法學關係の人々に、自分の學説を納得してもらうだけで満足出来なかつた。ぢかに國民にうつたへたかつた。話しかけたかつた。それ程日本は危急存亡の關頭に立つてゐる。」

「さうおつしやると、先生がお書きになつた『憂國の叫び』や『日本人の大使命と新機運』が、それにあたりますね。」

「さうだ。あれはたしか大正十年だつたと思ふ。寝ても覺めても、この日本が心配でたまらなかつた。だから一年の中に二冊も書き上げて、國民に呼びかけた。」

「先生、然し先生のお叫びが大きくなればなる程、益々心配が心配を生んで行つたのが残念でなりません。」

「うむ。しかし眼のあいてゐる人物がないでもないぞ。そろ／＼動き出してゐると感ぜられる。」

一切萬事從來のやり方では、降り坂に落ちて行くばかりだ。政治も外交も根本から一新しなければならぬ。商工業も教育も一轉して新しい方向に出發しなければならぬ。復古して肇國の本に返り、そこからもう一度出直すのだ。

維新この方、洋化主義の五十年と言つても過言でないぞ。にはかに西洋人に接觸して畏怖を感じ、唯々我を西洋化することが開國進取と考へた。政治の基から人事の末に至るまで、ことごとく西洋化することが文明開化と考へた。我を一も二もなく野蠻未開と卑しみ、國粹を恥ぢ、一日も早く西洋人に似ようとあせり、改めないのを因循姑息と笑つた。何たる狂氣の沙汰か、笑止千萬のことだ。」

博士の語氣は強い。師のお顔を見つめる門下生の顔は紅潮して、口を眞一文字に結んだまゝ動かない。

——西洋人を恐れ貴び、西洋の思想といへば、悉く之に叩頭せんとするの大勢は終始一貫して、日本人の頭腦を支配せり。斯くの如くにして、我卑しく彼尊く、西洋人に伍することを得るを以て、無上の光榮名譽とし、一意西洋人に稱讃せらるるを喜ぶの風は、今も尙一世を蔽へり——

師のお言葉の一節を思ひ出してゐるのであらうか。

「更にだ、西洋崇拜の弊は、遂に國體に關する異説を生んだ。何たる奇怪事だ。」

先生は、悲憤の餘り、體を起さうとなされる。然し病氣は師の體力を奪つてゐた。他の門下生が、話相手をしてゐる門下生を突いた。先生の御病氣にさはると言ふのであらう。すぐそれとさつて一禮をなし、靜かに病室を出て行つた。

——我等は日本國家を愛する。日本國民にあつて、國家主義は或る主義に對する理論の形式ではなく、信念であり、感情である。恩愛の心、憧憬の情、我等は日本國家と離るることを得ぬ。國家は人の本性に發し、國家に於て人は完成し永遠なることを得る——

と、話されたかつたのであらう。門下生達には、師の心中がはつきりわかるのである。

「わしはな、わしは……。」

門下生たちが、先生のお體を心配して相手をさしひかへようとした。

「よく聞けよ。」

國家者最善也

書吉慎杉上

門下生がたまりかねて

「先生、少しお休みになつては。」

と、言つた。その時好都合にも主治醫の診察があつて、話は途切れてしまつた。

やがて診察が終ると、博士は枕許の鉢植に眼をやりながら、土から僅かばかり顔を出した

芽に、自然の大きな力を思うて瞑目した。ふと故郷の自然の風物が心の中に浮んだのであらう。

「わしはな、今ふつと生れ故郷を思ひ出したよ、もう一度歸つてみたい。」

「早く御全快なさつて、お行きなさることの出来ますやう祈ります。」

「うむ、君は加賀へ行つたことがあるか。」

「ありません。」

「さうか、連れて行つてやらう。」

「是非お供いたしたうございます。」

「それは静かな町だよ。よく父から建武の忠臣畑時能公の奮戦談を聞いたものだ。なつかしう、一度歸りたう。」

大聖寺川の静かな流れ、はるかに聳える靈峯白山、落ちついた町の軒並、素朴な人々、これらが走馬燈のやうに心の中をかけ廻つて、幼年時代のなつかしさにひたつてゐられるので

あらう。

四月になつても一向病氣は快方に向かはないばかりか、警戒の要があると主治醫から言はれた。體力はめつきり衰へたが、氣力はまだしつかりしてゐた。

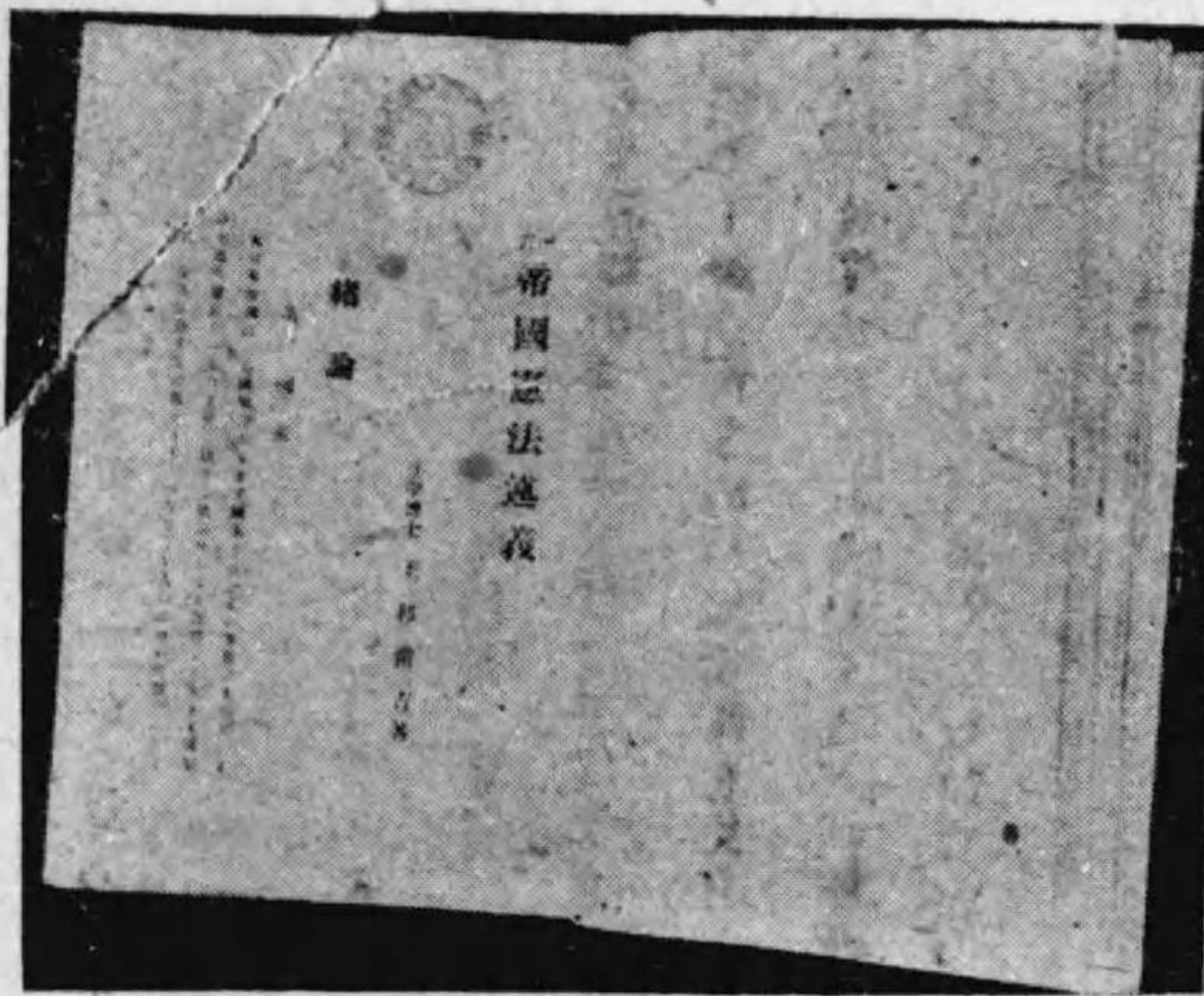
「先生、リンゴ汁です。」

静かに病室にはいつて來た門下生である。

「うむ。」

その聲は細かつた。二口、三口うまさうに吸つた。そしてまた瞑目した。病室には二、三人の門下生が、青ざめた顔で師を見守つてゐる。蒲團の上に出された師の兩手は、骨ばつて白い。一文字に結ばれた口もと、門下生達は師の二十年餘の苦闘を思ひ、いまだ報いられない今日を思うて目頭が熱くなるのであつた。博士の口もとがかすかに動いて兩拳が握られた。

——日本國民は 天皇を戴き、仰ぎて慈父としてゐる。 天皇と國家と合一し、國家を愛す



著書

るは、一に 天皇に忠誠を盡くし奉るに歸するもの、實に日本國體の精華である。大君のためには、生命を鴻毛の輕きに比し、肝腦地に塗れて悔いざるは、日本國民の本望とする所である。而して、これを即ち愛國とする。忠君即ち愛國なるは、我が國體にして初めてみられるところ、されば日本國民の愛國心は深き道德的根柢あり、統一あり、明白であり、百世不變常に生きくして躍動する。――

微笑が、師の口もとに見えるやうである。やがて眼をあげられた博士は、門下生を見つめられた。

「先生。」

門下生の一人が、師をお呼びしようとしたが、聲が出ず、唯熱い涙がぼたりと膝もとに落ちた。

「皇居を拜ませてくれ。」

突然さういはれて頭をもたげようとなさつた。門下生たちの介添で床の上に起きなほると、うやくしく首を垂れた。やがてまた横になられた博士は日頃愛誦の七言の古詩を口ずさんだ。門下生たちは、博士のこの安らかな姿に見入りつゝ聞き耳をたてたのである。

昭和四年四月七日、家族や數多の門下生たちに見まもられながら、空しく息をひきとつた。門下生たちは聲をあげて泣いた。そして國を思ひ、大義を宣揚して、師に報いようと敢然として立上つたのである。

誠に博士の言の通り、進むだけ進んで頂上に達し、行き詰つた日本は、一轉更新の機運が隨時隨處にきざし、やがて澎湃たる國家革新ののろしが上り、遂に大東亞戦争の今日を迎へ



北條時敬

たのである。地下の博士も新日本の逞しい建設の姿に快心の笑を浮べてゐることであらう。

神童

孝明天皇の安政五年春三月、北條時敬は金澤市池田町三番丁の小舎に呱呱の聲をあげた。時あたかも米國使節ハリスの強要に、衰運の江戸幕府は通商條約を締結しようとして勅許ならず、世路騷然たるものがあつた。

國歩艱難の世に生を受けた時敬は、幼にして賢く、成長につれて理解力記憶力の旺盛なること他に比類を見なかつたといはれる。明治初年のことである。今の國民學校に當る區學校が當時の金澤に數校あつた。時の知事内田政風はこの區學校全部から十數名の優等生を選抜し、賞状を授與したのであるが、その中に時敬の名が眞先に數へられてあつたといふことである。時敬を目して人々が神童と呼んだのも故なしとせずである。梅檀は二葉より香しとは正に時敬の如きを指すべきであらうか。

すでに幼にして稚心を去り學問を以つて國に奉公せんと立志した時敬は、その勉學振りも尋常一様ではなかつた。毎日毎夜しかも深更まで孜々として努めたのである。

十六の時金澤英學校に入つて、英語數學を兼修した。その進歩の顯著なること驚くばかり、第二年目には一躍して同校助教備に拔擢されたのである。ついで十九にして金澤啓明學校に學んだが、これ又間もなく同校助教備に任用された。生徒であり乍ら教師として後輩指導の大任を帯びる。今日から思つても不思議とする程、當時にあつても異數の人事であつた。これといふのも時敬の學力が拔群であり、年少とも思はれない識見の高邁さがかくあらしめたものである。

この頃、時敬はしばしば人に語つて、「眠つてゐる間は死人と同様である、小眠は長生と同じではないか。」と、時敬自らはその言の如く、毎夜二時前に寢に就いたことがなく、睡眠時間は僅かに三四時間に過ぎなかつたといはれる。殊に讀書や寫本に熱中すると二晩や三晩の徹夜は別に珍しいことでなく、それでゐて晝の公務は平生通りに執つて些かも疲れを見せる様になかつた。

又ある時友人に向かつて、「上根の人はいざ知らず、下根の者が立派な人物になるには一通

りの鍛錬では到底駄目である。」といつて激勵しあつたのである。

このやうに神童といはれた時敬が、勉學に努めた爲、聽て初志の一端を貫徹して、明治十八年七月東京大學理學部數學科を卒業し、輝く理學士の稱號を受けた。同十一月故山の石川縣專門學校に迎へられ、こゝに終生の業たる育英の道に一步をふみ出したのである。

義理

時敬は明治二十一年更に大學院に入つて専門學科の研究を重ね、出でて第一高等中學校教授に任ぜられた。當時斯道の權威として令名高かつた時敬は、心があつて一篇の論文さへ提出すれば直ちに博士號の學位を獲得出来るのであるが、時敬は敢へてその事をしなかつた。そして知人を顧みて、「内外諸大家の業績を見ると、どうも自ら薦める氣にはなれない。」といつて終にこの信念をかへなかつたのである。

時敬は數學の外に、自然科学全般並びに皇漢の學にも造詣が極めて深かつた。教授の餘暇しばしば漢書を手にして聖賢先哲の訓に稽へる所であつた時敬は、平素の生活も義理人情の

規範に則つて違はなかつたのである。

明治二十九年、時敬は始めて山口高等學校長となり、ついで同三十一年郷里に錦を飾つて第四高等學校長になつた。この間人物は愈々練られ謹嚴な面影は恰も古武士を想はせる風格

悔過者要導過之起頭遷善者

要導善之著落

時敬書

北條時敬書

があつた。しかし一度その心奥を窺へば情味實に豊かな恩愛の人であつたのである。

ある時の事である。學業優秀で師友間に信望の厚かつた一高校生が、ふとした過を冒して、それが學年末の及落會議に問題となり取調べられた。何某は深く前非を悔いて、一切を申し述べ仕末書を提出した。しかるに、その結果は校規の條項により止むなく内諭退學となつて

しまつた。この會議の直後、某教授が所用あつて校長室に入ると、時敬は差し俯むいて、目からはほろほろ涙を流し今にも嗚咽せんばかりであつた。意外の姿に接したこの教授は、いなく感動してありのまゝを同僚に告げた。それが聽て件の學生に傳はつたのである。一時は自暴自棄、全く廢人とならうとした學生も、時敬の恩情を知つて、深く感激し、卑屈なる心を一擲、勇往邁進誓つて師の眞義に報いんとしたのである。宜なるかな、同期生がまだ大學を卒へない中に、外交官試験に合格し面目を新たにしたのであつた。

時敬は、明治三十五年廣島高師校長に轉じ、その第一回卒業生を送るに際し、

「赴任は嫁入りのやうなものである。随分苦勞も多からうが、勤めるだけ勤めねばならぬ。萬一居たたまらぬ様な事情の出來た時は迷はずこの親の懐に戻つて來い。どんなに傷いて戻つても、いつでも抱きとる親元のあることを忘れるな。」と、慈愛溢るゝ言葉を與へたのである。巢立つ學生の感激こそ終生残る所のものであつたらう。

信 念

明治三十二年十月、伊藤公爵が地方事情視察の爲に出張したことがある。その折各地で豪奢な遊びを試みたことが新聞に出た。當時世人はこれを當然の事として何等怪しまなかつたが、第四高等學校長であつた時敬は、この記事を見て非常に遺憾に思つた。早速一書を認め公が金澤に入るに先だつて、これを呈した。「閣下が各地にて折花攀柳の浮名を流されるが、閣下の如き高名な人がさうした手本を示されては、我等が苦心の教育の効果は甚だ滅殺されるから氣をつけて欲しい。」と、直言したのである。公は快くこれを容れられて、その滞在中は行を慎まれたといふことである。

明治三十七年の初春、日露の風雲急を告げる時、端なくも高等師範學校の整理が文部省の議にのぼつたと噂せられた。時敬はこれを聞くと決然立つて日頃の強固なる所信を文部大臣に建白し、更に山縣公に對しては、文部の主班に黨人を据ゑることの不可なるを具申する等數回に及んだ。自己の正しいと信ずる所、權貴におそれず諤々の意見を開陳して止むことがなかつたのである。

聽て日露戰爭勃發するや、宇品港を控へた廣島市民は、出征將士の送迎に萬歳の日々をもつた。この時高師學生が公に軍人送迎の列に加つたのは、滿洲軍總司令部の出征並に凱旋の外數回を數へるのみであつた。しかも學校正門前の整列であつて、その爲に前後一時間の授業も缺くことがなかつた。これは時敬が、「學生は學問修業が當面の仕事である。軍人が君國に盡すのとその精神に於て異なる所がない。夫々その本分に向かつて勉勵するのが、即ち國家に忠を盡す所以である。」といふ信念から出たものであつた。

教育道

時敬は大正二年、廣島を去つて東北帝國大學總長になつた。當時徳望一世に高く、往く所夫々の特徴を活かして赫々たる業績を揚げたのである。仙臺には在職四年、天朝の信任益々篤く大正六年辱けなくも學習院長の恩命を拜した。越えて大正九年、學習院長の大任を完了して職を辭し、直ちに宮中顧問官に列せられた。しかして間もなく勅選貴族院議員になつたのである。時敬は老齡愈々君國に赤誠を捧げ盡瘁する所多大なるものがあつた。昭和四年四

月二十七日、この日近世教育界に偉大なる足跡を印した北條時敬が、春の櫻と共に東京市王子町原宿の自邸に逝いたのである。時に七十二歳を數へた。

想ふに時敬の一生は全く教育道の精進にあつた。郷土の生んだ大教育者北條時敬、今その教育卓見を日誌中から拾つて見よう。

士風の昂揚

明治四十年十二月二十四日、廣島高師第二學期終業式の訓辭中に、士風の昂揚を強調して、「然レドモ尙百尺竿頭ニ一步ヲ進メ、士風ヲ立ツル上ニ眼睛ヲ點ズル爲ニ勇爲着力ヲ望ムベキモノアリ。

古ノ武士ハ面目ト云フコトヲ重ンジテ一世ノ氣風ヲナセリ。今ノ氣風ヲ立ツルモノハ今ノ士人ナラザルベカラズ。教育ニ従事スルモノハ今ノ士人ノ精華ナラザルベカラズ。今ノ士人ノ氣風ヲ立ツルノ眼目三ツアリ。

己自身ニ在ルモノ、人ニ對スルモノ、國ニ對スルモノ是ナリ。

己ニ在ルモノハ名ヲ重ンジ恥ヲ知ルコト是ナリ。

人ニ對スルモノハ同情ト義氣是ナリ。

國ニ對スルモノハ殉國ノ精神是ナリ。」

と、教育者たらんとする學生の重責をさすと共に、士人の氣風樹立の方途を明示して残す所がない。

大人たるの學問

明治四十一年三月三十日の校友會大會に於て、卒業生に與へた訓辭に、大人となる道を學ぶことであると説いて次の如く言つてゐる。

「大人ノ學問ハ學生トシテモ出來ル。教職ニ在リテモ出來ル。社會ニ出デテ如何ナル仕事ヲ爲シ如何ナル境遇ニ在ルニシテモ出來ル。水戸ノ義公、松平樂翁ハ順境中ニ大人ト爲リシ人ナリ。豐太閤ハ亂世ノ風雲中ニ於テ大人ト爲リシ人ナリ。二宮尊徳ハ盤根錯節ニ逢ヒテ大人ト爲リシ人ナリ。」

大石良雄ハ逆境中ニ在リテ大人ト爲リシ人ナリ。

大人ハ常ニ平心虛懷^{まごわい}ニシテ脱捨自在ノ人ナリ。大人ハ不材ノ材ナリ。大人ハ正直ナルコト小兒ニ類スルモノアリ。」

と、この短い言葉の中に崇高なる教育道に生きた時敬の眞精神が卒直に陳べられてゐることを知るものである。



南 郷 茂 章

珍しく雪の降つた東京の朝は、身を切るやうにつめたい。

「すごい雪だなあ、思ふ存分雪遊びが出来るぞ。」

茂章は、弟の茂重に話しかけながら、停留場へいそいだ。いつも電車で、學習院初等科へ通學してゐるのである。いつもならば次々と来る電車も、大雪のためか、今朝は一臺も来な
5。

「困つたねえ、茂重。」

「歩いて行かう。練兵場を横切ると近道だよ。」

「でも……、歩ける。ずるぶん深い雪だよ。」

「大丈夫。」

「では、練兵場を抜けて行かう。」

雪は深く、道は遠かつた。二人は息をきらしながらいそいだ。しかし、中程で弟はとうとう雪の中にしゃがんでしまった。困り切つた顔をして、しばらく立つてゐた茂章は、

「遅刻したら、いけないだらう。おんぶしてあげよう。」

と、やさしく脊中を向けた。外套を着た弟はなかなか重かつた。

「大丈夫。」

心配さうに聞く弟に、

「うん、平氣だよ。」

と、五年生の茂章は元氣に答へた。

汗がにじみ、目もくらみさうだつた。足が滑つて轉がりさうだつた。やつとの思ひで練兵場を抜けた兄弟は、町家の時計を見ながら、重い足でかけ出した。

かうした、頑張りやの茂章は、一面朗かで、屈託がなかつた。夏など、よく川へ出掛け、鰻とりに夢中になつた。おもりを掴むと、

「そら、鰻だ、腹の赤い……。」

などと言ひながら、バケツの中へ投げこんでは弟たちを笑はせた。

後に軍神と崇められる海軍少佐南郷茂章は、海の搖籃地として、その名もかぐはしい江田島に生まれた。少年時代を東京で過ごし、兵學校の難關を突破すると再び江田島に行くことになった。海に生まれ、育ち、海を背負ふ。この一つながりの「海」も、その家系を考へてみると、成程とうなづかれる。

先祖は、代々加賀藩に仕へ、祖父は金澤の十間町に住んでゐた。剛毅で不屈、だまつて研鑽し實行する、加賀武人の典型ともいふべき方であつた。砲術・兵學を深く研究すると共に、早くから海洋日本の將來を考へてゐた。外國より購入した藩の軍艦に乗りこんで、七尾港に廻航するなど、藩の海軍建設に力をつくし、後に帝國海軍の創設に半生をささげた。父、次郎少將は、明治三十七・八年の戦役に、水雷艇長として勇名をさせ、東郷司令長官より感状を授けられた猛將である。

「海を制する者、世界を制する。」との信念の下に、海軍々備の充實に努めた。わけでも軍縮會議により、米・英よりも劣勢な軍備比率となるや、量的に劣る軍備を質的に補充する方途

につき肝膽を碎いたのである。

かうして、父・祖父……はるか祖先よりの純忠至誠の血は、少佐に傳はつた。

兵學校に入學すると、多くの先輩が、血と汗で築いた傳統の中に、一心に勵んだ。一度劍をとると最後の勝利を得るまでたたかふ。彈がつかれば劍を、刀折れる時は鐵腕でたたかふの、逞しい氣魄は、日々に訓練され、飯を食べる暇もない厳しい日課に、技は磨きに磨かれた。實戦さながらの猛烈さで名高い「棒倒し」や「彌山登り」には、一騎當千の猛者ぞろひの生徒の中でも、少佐の姿は、ものすごく、それこそ彈丸のやうにとび込み、戦車のやうに突進した。

彌山に登ると、繪のやうにひろがる島々を眺めながら、親しい友五・六人といつも語り合つた。

「俺は航空隊へ入らうと思ふが。」

「俺も。」

「俺もだ。」

「三人とも一つ心か。……しかし、飛行機といつても、何に乗る、南郷。」

「まづ、戦闘機。」

「貴様のやうな性質には、戦闘機はもつてこゝだ。」

朗かに笑ふ若櫻たちの聲は、いつまでも続いた。

それから數年。生涯をかねて憧れの大空に捧げる爲、飛行學生を志願し研究に精進して、常にすぐれた成績であつた。學生長をしては、朗かで親切な性質に加へて持前の義侠心は、學生達から深く敬愛された。卒業の後、英國在勤日本大使館附武官としてつぶさに英國軍を研究、この國を相手に戦ふ日の必ず來ることを考へつゝ歸國した。

支那事變がはじまつたのは歸朝間もない時であつた。再び大空へ。而も硝煙渦巻き砲彈雨飛する戰場へ。出でては還るを考へぬ少佐の心は、秋の大空そのまゝにすみ切つてゐた。出發に際し家郷に送つた便りには、

拜啓。父上様よりの御書面拜讀有難く存じ奉候、明朝愈々戦地向け出發、男子の本懐至極に御座候、日頃の腕と體力を以て一生懸命御奉公仕る可く、七生報國の眞意も近頃味ひ得る境地に相成候。残暑の砌御兩親始め皆々様の御健康を祈り上げ候。先づは内地出發に際し一筆御挨拶申上候。尙書面は大村航空隊氣付下に御發送相煩度。

昭和十二年八月二十一日

茂 章

御兩親様

とあり、楠公の心を心とする少佐の胸中、七生報國の赤心の外何ものもなかつたのである。

安慶・蕪湖へ疾風のやうに出沒し、漢口・南京……へ幾十度の空襲。中でも中秋の雲狂ふ揚子江の空を、遠く安慶に飛び、航空戦史に嘗て無い長距離猛撃を行ひ、世界の人々を驚嘆させた。その時、タンクのパイプを破壊され、機内はたちまち呼吸困難となつた。しかし少佐は少しもあわてず、右手でパイプを押へ、左手で操縦桿を握りながら遂に基地へ還つた。

又南京大空襲を行つた際、連敗の恥をそがうと挑みかかる敵三十數機の眞唯中へ、部下六機と共に突入、瞬く間に十三機を撃墜し、全機悠々として基地へ還り、司令長官より感状を授けられた。この日、南郷機の車輪は敵弾に破れ、用をなさず着陸の際機體は轉覆した。人々が驚いて駆け寄ると、少佐は翼の下から這ひ出し、

「古賀の姿を見失つたが……古賀は還らんだらうか。」

と、部下の生還を念じ、沈痛な面持で尋ねるのであつた。五分・十分……二十分、たゞ一機還らぬ古賀機を大空に待つ心はどんなに苦しかつたことか。

「あつ、古賀機が。」

はるか雲間に眺める少佐の頬には、涙が光つてゐた。後で、この事を聞いた古賀は、「古賀は還らんだらうか……の一言。自分は、この方の爲なら喜んで死ねると思つた。」と。

かうして、一度愛機に乗ると、聰明・俊敏な頭腦で縦横に作戦し、豪膽・冷靜な態度で一發必中の攻撃を行ひ遂に撃墜敵機百機を越え、文字通り敵膽をうばつたのである。少佐の率ゐ

る戦闘機隊が獨得の編隊を以つて敵に迫ると、「南郷機來る。」と、戦はぬ前から逃げ支度をする有様であつた。

東雲に、ほのぼのと黎明が訪れ、大陸特有の雜木林に、弦月が淡くかかつてゐる。

昭和十三年七月十八日の夜明け前、大陸第一線のわが飛行基地では、天地も揺がすばかりの爆音が轟き、翼をばいにひろげた荒鷲が早くも殺氣をふくんで羽搏いた。

この日、南郷少佐指揮の戦闘機隊は、爆撃機隊攻撃機隊と合し、南昌に巢喰うてゐる敵空軍を撃滅する爲に急襲しようとするのである。朝風を截る機上では、出發前の餘裕をそのまま、口笛でも聞けさうな気分である。

曉雲をついて南昌へ——急襲に夢を破られた敵機十五機は、いそいで舞ひ上りさま、逃げようとあせつたが、少佐指揮の戦闘機隊は、たちまち八機を撃ち墜した。少佐は、更に敵戦闘機に狙ひを定め、沈着果敢な一發必中の猛攻撃を行つた。敵機はぐらりと揺れると、火を

吹いて墜落。と、前方に又も敵機。ほくそゑんだ少佐は猛然と火ぶたを切つた。この時、先に射とめられて墜落中の敵機は、斷末魔の不規則な旋回をして、思ひもかけず、今し右旋回をしようとした南郷機の左機翼に觸れた。ああ、この一瞬、無敵南郷機の機體は碎け、少佐は愛機と共に壯烈鬼神も哭く戦死を遂げたのである。それは、撃墜の神様と言はれる少佐の神技でも、どうすることも出来なかつた不可抗力であつた。大編隊は、赫々の武動をたてて基地へ還つた。しかし、常に眞先に着陸。快活に笑つてみせる戦闘機隊の一番機は遂に還らなかつた。分隊長の壯烈な最後を報告しながら、隊員は男泣きに泣いた。蒼茫と暮れゆく大空を、じつと眺めてゐると、隊長機が今にも、雲をきつてあらはれるやうでならなかつた。

「分隊長。」

思はずも、懐かしい隊長の名を呼んでみる。

「分隊長の魂をうけつぎます。きつと敵軍を全滅させます。」

「あつ、見える、分隊長が。分隊長は生きてゐる。大空にいつまでも生きてゐる。」

隊員は、冷え冷えとひろまる大空に、いつまでも誓ひ合ふのであつた。

日米決戦の陣頭に立ち、壯烈な戦死を遂げられた山本元帥が、飛行學生を教育してゐたある日、飛行將校の覺悟について述べられたことがあつた。

「わが海軍は、ワシントン、ロンドン兩條約により、米・英より遙かに劣勢な地位に引き落された。この劣勢を輔ふ道は唯一つ、諸君の覺悟にまつ他はない。その覺悟とは何か。一發必沈敵艦と刺し違へ、爆弾を抱いて敵艦にぶつかり、敵艦もろとも護國の鬼となる覺悟でなければならぬ。帝國海軍はこの道を進む以外、良策はない。果してこの覺悟を以つて行けるか。」

と。その言葉が終るか、終らぬにサット手を舉げ、「やれます。」と、答へた者があつた。

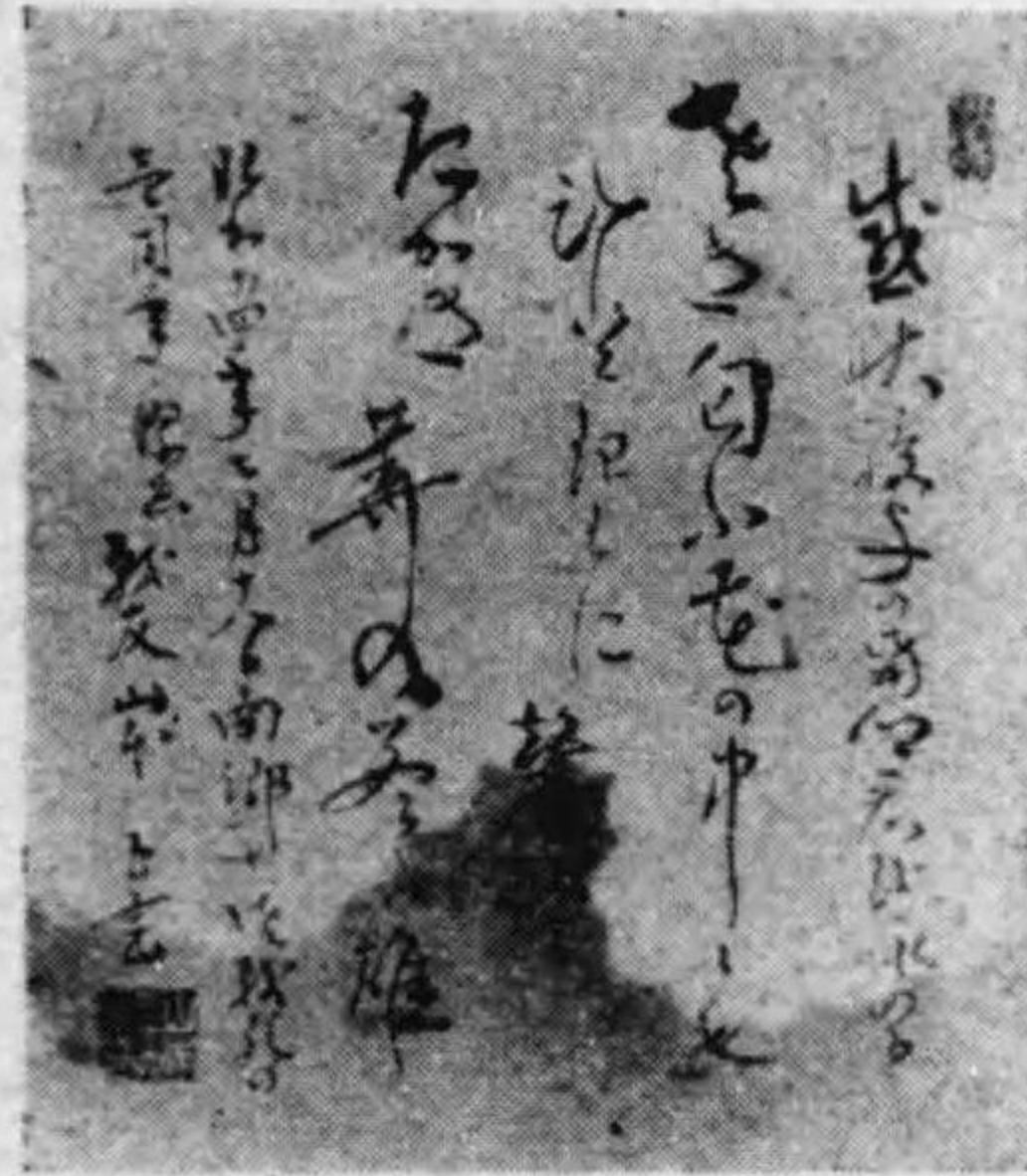
それこそ、實に飛行學生時代の南郷少佐であつた

南郷少佐戦死の報を耳にすると、時の海軍次官だつた山本元帥は、「惜しい男を失つた。」と、深く瞑目せられた。少佐に、輝く感狀が授けられると、元帥は



朝 日 長 章

さき匂ふ花の中にもひとときはに馨ぞたかき華の益良雄
と、詠まれた。



紙色の帥元本山

今や我が海軍魂は山本元帥や、それに呼應して誓つて立つた南郷少佐によつて立派に顯現せられ、全國民をして「山本元帥に續け。」我が郷土人をして、「南郷少佐に續かん。」の決意を固めさせてゐるのである。

朝日長章は能美郡根上町字福島の農家に生まれた。父は長次郎、母はつるといつた。父母が結婚して十一年目に生まれた一人息子である。長章は生まれてから病氣らしい病氣もせず、若竹のやうにすくすくと伸びていつた。

小學校の四年生の頃から相撲の選手になつた。そしてどんな取組にも敢へて負けはとらなかつた。

學校の成績は學級で常に上位にあつた。しかも八・九歳の頃から家に歸ると必ず畠の水かけを日課のやうにした。これは此の地方の畠が砂地である爲にどうしてもやらなければならぬ大切な仕事であつた。

長章が相撲に勝つて元氣よくなると、父はよろこんで迎へながらも、

「自分がいつも一番強いと慢心してはならぬぞ。」

と、いましめ、

「相撲で練るもよい。だが今にお國の爲に働く體だ。そまつにするぢやないぞ。」

と、言ひきかせた。

昭和十一年、十六になつた長章は、高等科の卒業を目の前にして自分の將來を深く考へた。やがて、當時級の中でも特に親しくしてゐた小川衛少年と、二人は、海の少年航空兵にならうと誓ひあつた。

長章の軍人への志は、もつと幼い頃に培はれてゐたのだ。

上海事變の突發したのは、長章の五年生の時である。毎日のやうに郷土の兵隊さんが發つていつた。その度ごとに級友たちとほど近い寺井驛に歡送したのである。小さな全身をふるはせて萬歳を叫ぶ長章。腕をふつて應へる勇士の眼は、どれも眞鍮にほのほと燃えてゐた。「お國に一身を捧げる兵隊さん。」「えらい兵隊さん。」長章の感激は深かつた。いつしか長章の胸に兵隊さんにならうとする芽が強くはぐくまれてゐた。そして成長と共にこの芽は太く逞しくなつていつた。

高等科に在る頃、日支の間は再び暗雲に閉ぢこめられて來た。毎日の新聞は國交の危険を

傳へ、いつ、どこで爆發するかも知れない有様であつた。少年長章は、今後の戦は必ず空中にあることをひそかに覺つた。「空こそ男子の生きるところ。」「さうだ。」「目的に邁進しよう。」「決心は巖の如く毅くかたかつた。」

しかしたつた一人の男の子、しかも自分の卒業を一日待ちにしてゐる父母、この両親にどうしてこの氣持をうちあけたらよいか、長章は日夜心を苦しめた。小川君からいつてもらさうか、いやいや人に頼むこともいるまい。「みくにの爲に。」と、いつてゐる父だ。自分の眞心さへわかればきつとゆるして下さるだらう。意を決した長章は、ある夜両親にうちあけてそのゆるしを乞うたのである。

母はしみじみと

「長章、それは本氣かね。うすすそんな話を聞かないでもなかつたが、けふまでだまつてゐるので、あきらめたものと思つてゐたのだよ。」

母はちよつとだまつて、又つづけた。

「一人子だし、お父さんにして見れば、お前の大きくなるのをどれだけ楽しみにして待つてゐたか知れないのだよ。」

うつ向いて聽いてゐる長章は、下唇をかみしめて膝の上をじつとみつめてゐた。

「卒業すれば、田畠の方はああもしよう、かうもしようといつてゐた矢先ぢやないか。ま

あ、無理もいはぬ。しばらくお父さんの手傳ひをしてあげたらどうかね。」

母の言葉はいつしかうるんでゐた。

無理はない。こんな大きくして下さつた自分を、どうして簡単に手離すことが出来よう。

両親の慈愛がひしひしと長章の胸をうつた。しばらくして父は靜かにいつた。

「二・三日ゆつくり考へて見なさい。その上できめよう。」

三日たつて両親の前に出た長章の決心は、依然として動かなかつた。

両親も三日の間思ひ悩んだのであつた。しかし再び息子の固い覺悟を聽いたとき、日頃神佛のみをしへを信ずる両親は早くも深いさとりに導かれたのである。

「長章を自分たちの子供であると思つてゐたのが間違ひであつた。十一年も見なかつた子供、それなのに思ひもよらぬ男の子をまうけて、今日まで何の心配もなく育つていつた。さうだ。私どもは神から授かつた子をお預りしてゐたのだ。おかへし申す日が來たのにちがひなす。」

今は何をいふべきことがあらう。潔くしてやらねばならぬ。両親の心は明かるく晴れやかになつた。父は和らかな眼でいつた。

「お前の決心が、そんなに強いとは思はなかつた。一時心で熱中してゐる。いまにさめると考へたりしたが、どうやら父の淺はかだつたらしい。兎に角受けてごらん。」

「だが、長章、この事だけは決して忘れてくれるな。やるからには、御先祖をはづかしめぬ立派な軍人になつてもらひたい。よいか。」

「はう。」

長章は力強く肯いた。

昭和十一年の五月、寺井驛頭に手を握りあつて激勵してゐる二人の少年があつた。

「小川君、必ず後からゆくぞ。」

きつと口を結んで眼を光らせた長章。

「待つてゐるぞ。なあに一年はちきだ。」

小川少年は残念さうに長章の手を握りしめた。二人は少年海鷲を目ざして受験した。そしてそろつて合格したのに、長章に採用の通知は遂に來なかつたのである。一人息子の爲だつたらうか。

長章の悲歎ははげしかつた。階上の部屋に閉ぢこもつて食を採らなかつた程であつた。先に思ひ止つてはとさとした母はかへつて、



「たつた一回のことで、何としたことか。採用のなかつたのは、家庭調査の爲かも知れませんが。來年こそ、うんとかんばりなさう。」と、激励した。

長章はその翌日から新しい發足を始めた。晝はほど近い小松市に産業戦士として働き、夜は晝の疲れを吹き飛ばすやうに猛烈な勉強をした。机の前に筆太に、「初志貫徹」の座右銘を掲げて、常に自己を叱咤した。

翌十二年、遂に最優秀の成績で合格採用された。かくして輝かしい海鷲の第一歩が近づいた。同年六月一日吳海兵團に入つてすぐ海軍飛行偵察練習生となつたのである。健康には満ちたる自信がある。長章にはどんな訓練も少しも苦にならなかつた。九月二等航空兵に進み、通信學校に電信術をならつた。翌年六月修業と同時に始めて軍艦熊野乗組を命ぜられた。軍艦生活三箇月にして再び、擢んでられて横須賀航空隊に入つた。この間、長章の技術は磨かれ魂は鍛へられた。十一月二等航空兵に進み、十四年三月卒業とともに大分航空隊所屬を命

ぜられた。この頃所謂海軍獨特の月月火水木金の猛烈果敢なる訓練と演習がつゞけられたのである。やがて十一月一等航空兵に進むとその翌月舞鶴所管にうつつた。

練磨に練磨を重ねてゐた長章に檜舞臺は刻々と迫つてゐた。すでに支那事變は進行し、皇軍は大陸を縦横に活動してゐた。遂に日は來た。長章は萬死に一生を托して出陣した。先づ南支は九塘附近及び賓陽附近の戦闘に参加、空より敵軍を攻撃、偉勳をたてた。十五年天長の佳節に、かしこくも支那事變の功により勳八等をたまはつたのである。

更に同年九月より十月にかけて再出動、ビルマ公路と雲南襲撃行に赫々たる戦果をあげた。長章はこの行に、特に技術優秀、行動勇敢なりのかどによつて部隊長よりしばしば感状をうけたのである。

昭和十六年を迎へると、我が國と米英の關係は益々深刻化し、暗雲は戦雲をはらむにいたつた。この年の秋、長章は久し振りで歸省したのである。この度の歸宅は洵に意義の深いものであつた。まづ豫てから養女として迎へられてゐた千代子さんの結婚があつた。慌しく

數日は過ぎた。その間にも、氏神への参拜、祖先への墓参を怠らなかつた。

いよいよ出發を明日に控へて、親子夫妻はなごやかに語りあつた。

「米國との間が危まれるが、どうかね。」

父は新聞から目を離していつた。今は堂々たる長章は赤銅色の頬をほころばせながら、

「私どもの働く機會が近づいたといふ譯ですね。」

淡々とした話し振り、兩親は、別人のやうに逞しくなつた息子をしげしげと見直さずには
をられなかつた。

「日・米戰とやらになると、お前たちの出るのが一番早いといふわけかい。」

母は案じ顔にたづねた。母の横に若い新妻も靜かに耳を傾けてゐる。長章は母と妻を顧みて、

「さうですね。まあさう思つて下さると間違ひないと思ひますね。かうして千代子と一緒

にして戴いて、ほんの數日で別れる。ひよつとすると永い別れになるかも知れませんが……

……何んですね。こん度の歸省は白木の箱だと思ひます。」

こゝまでいつた長章の眉は一瞬かげつたやうに見えたが、すぐもとの朗かさに戻つて

「まあ、くよくよせず達者で暮して下さいよ。」

と、につこりした。もとより兩親は志願の時から、覺悟は出來てゐるものの、何分若い千代
子を思へば、宿縁の淺きに悲しまれてならなかつた。しかし翌日長章の出發にあつて父母
も、妻も、

「心残りなく、米國の爲に働いて下さい。」

と、激勵して別れたのである。

——帝國陸海軍は本八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり——

昭和十六年の十二月八日朝まだき、電撃の如きこの放送を聞いた國民は、「遂に來た。」

「遂に帝國は立ちあがつた。」と、叫ばずにをられなかつた。それも深い感動が聲になるまで
しばし時刻はあつたのだ。

長次郎、つるの兩親は、日米開戦の報をきくと、直ちに千代子を呼んでラヂオの前に静坐したのである。三人の心中を、この秋残していつた長章の言葉の一つ一つがよみがへつていつた。間もなく電波は、我が海軍航空部隊のハワイ眞珠灣の大奇襲を發表した。

「あつ、長章が、必ず参加してゐる。」

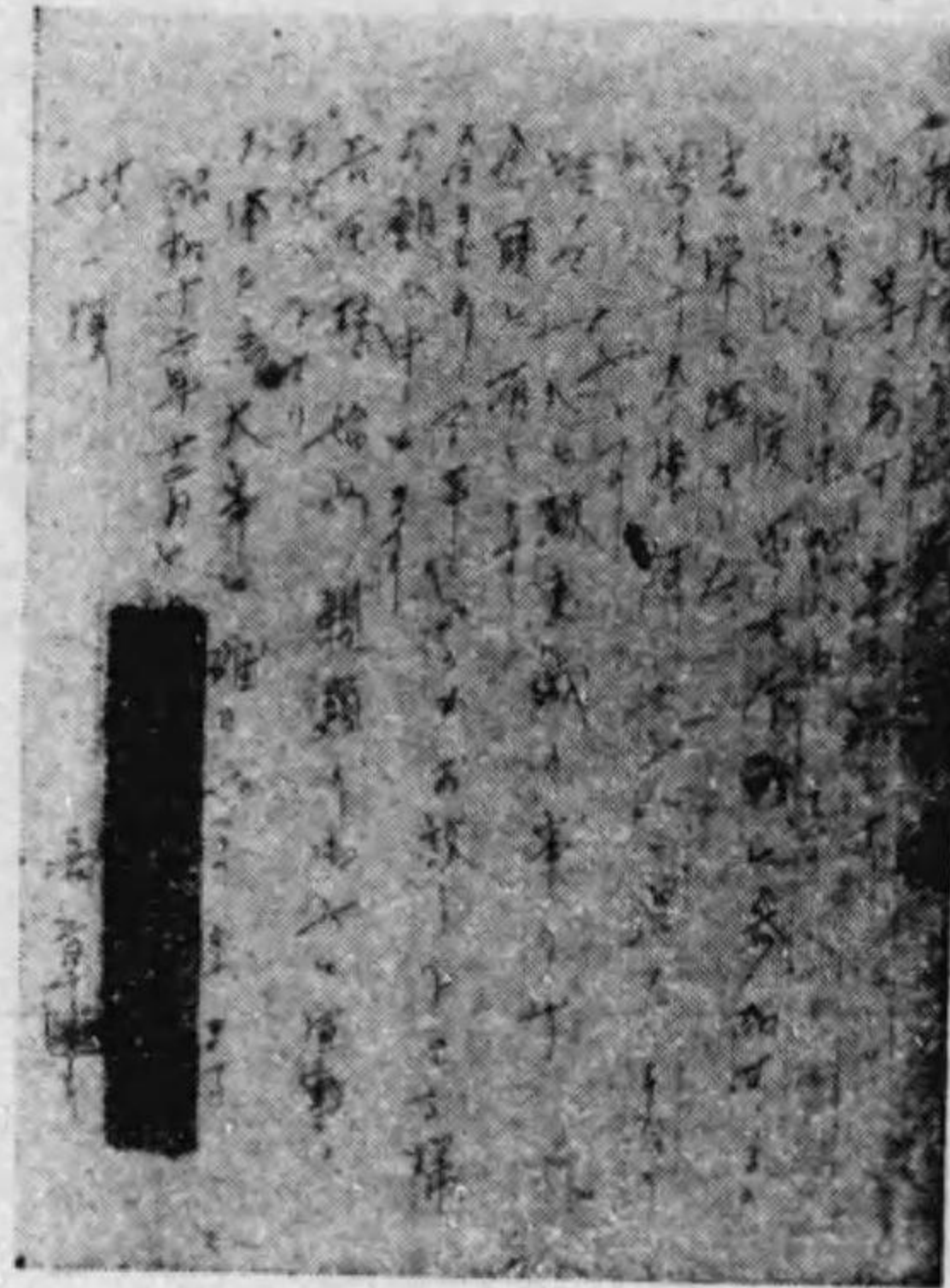
父母も妻も、同時に直感したのである。次の瞬間三人は目から熱い涙が湧然と流れるのをおぼえた。

長章の乗り組んでゐる〇〇航空母艦はまつしぐらに波濤高く東へ東へと慕進してゐた。

明け染めた空の光を頼りに長章は遺言を認めてゐる。どの戦友も皆黙々として或はペンを或は筆を走らせてゐる。長章は暫く瞑黙してからペンを採つた。

遺言

物心ついでこゝに幾星霜、何等なすことも知らず幾重にもおわび申します。小生この度ハ



遺言

ワイ作戦に参加するの光榮を得ました。男兒の本懐何かこれに過ぐるものあらんやです。唯々一心に敵撃滅のことのみ念頭にあります。親戚の方へよろしく。お體をお大切に、確りやつて來ます。

十二月七日午前六時

航海中

封筒に入れて緘した長章はすっかりはればれとしてゐた、千載一遇とはこの事か。軍人として自分の身がしみじみ幸福に思はれてならなかつた。「死所を得る。」乃木大將が二人の子息を失つての感懐が思はれた。母艦は刻一刻眞珠灣に迫つてゐる。神々も照覽あれ。長章は

やりますぞ。父母よ、妻よ。心で呼んで別れを告げた。芒洋たる太平洋の彼方に郷土の景色がふと浮んで消えていつた。

長章の分隊長より父長次郎にあて

十二月八日、長途航海の疲労の色もなく固き決意を眉宇に表して、午前二時四十分發艦、四時三十分敵艦隊上空に突入、突撃の令に對し熾烈なる敵高角砲機銃弾の飛び交ふ中を物ともせず、勇猛果敢なる急降下爆撃を決行し、見事爆弾命中、一大爆發を惹起せしめたるも、爾後行方不明なり。遂に十八日に至るも救助し非ずとの報に接し戦死と認定せられたり。

と、あつた。

幼にして皇國の御楯ならんと決心した長章は、一切の私情をなげうち一意その初志に徹底した。二十一の若櫻をもつて華々しく眞珠灣頭に散つたのである。あゝ勇なる哉、壯なる哉。

拔群の偉功、畏くも天聽に達するや特に二階級進められ、海軍一等飛行兵曹となり、功五級勳七等を授けられた。

日・米空の決戦正に酣の今日、郷土の生んだ海鷲朝日長章は眞珠灣頭を脚下に踏まへ、雲をかかけてはるかに、後進の若人が陸續と空へ空へとはせ參する姿を望み見るとき、自ら莞爾たるものがあるであらう。



清水吉雄

昭和十六年十二月ハワイ奇襲の航空部隊はひそかに基地を出港した。攻撃の鋭鋒を何處へ向けようとするのか、誰も知らない。嚴重な燈火管制下我が無敵航空母艦群は肅々と進航する。寒風凜烈怒濤狂亂の北太平洋である。巨大な艦體も流石にひどく動揺する。

航海既に幾日か、遂に、

「敵アメリカの太平洋艦隊主力を撃滅せよ。」

との命令が出た。暴慢なる宿敵アメリカに今こそ天誅を加へるのだ。目指すハワイは刻々と近づく。山口提督を司令官とする航空戦隊の勇士は折からの暴風をもともせず欣喜雀躍敵撃滅の秘策を胸に進撃した。

兵員室は緊張の中にも賑かである。

「皇國の興廢かゝりて此の征戦にあり、粉骨碎身各々その任務を全うせよ。」

山本聯合艦隊司令長官の訓示電報は、いやが上にも兵員の士氣を鼓舞する。

「おい、清水飛行兵、しつかりやらうぜ。」

「うむ、頑張るとも。きつとやる。」

海の若鷺清水一等飛行兵の眉宇には固い決意が溢れてゐる。

部署はすでに定つた。清水飛行兵は戦友とともに第三〇七號機に偵察員として搭乘し、軍

艦〇〇雷撃隊第一中隊第二小隊三番機として、眞珠灣内の敵戦艦を雷撃するのである。

たつぷりと筆に墨汁を含ませて、さらさらと書き出した。

「愈々布哇空襲の前日になりました。立派に戦つて來ます。決して犬死は致しません。清水家の爲に御安心下さう。」

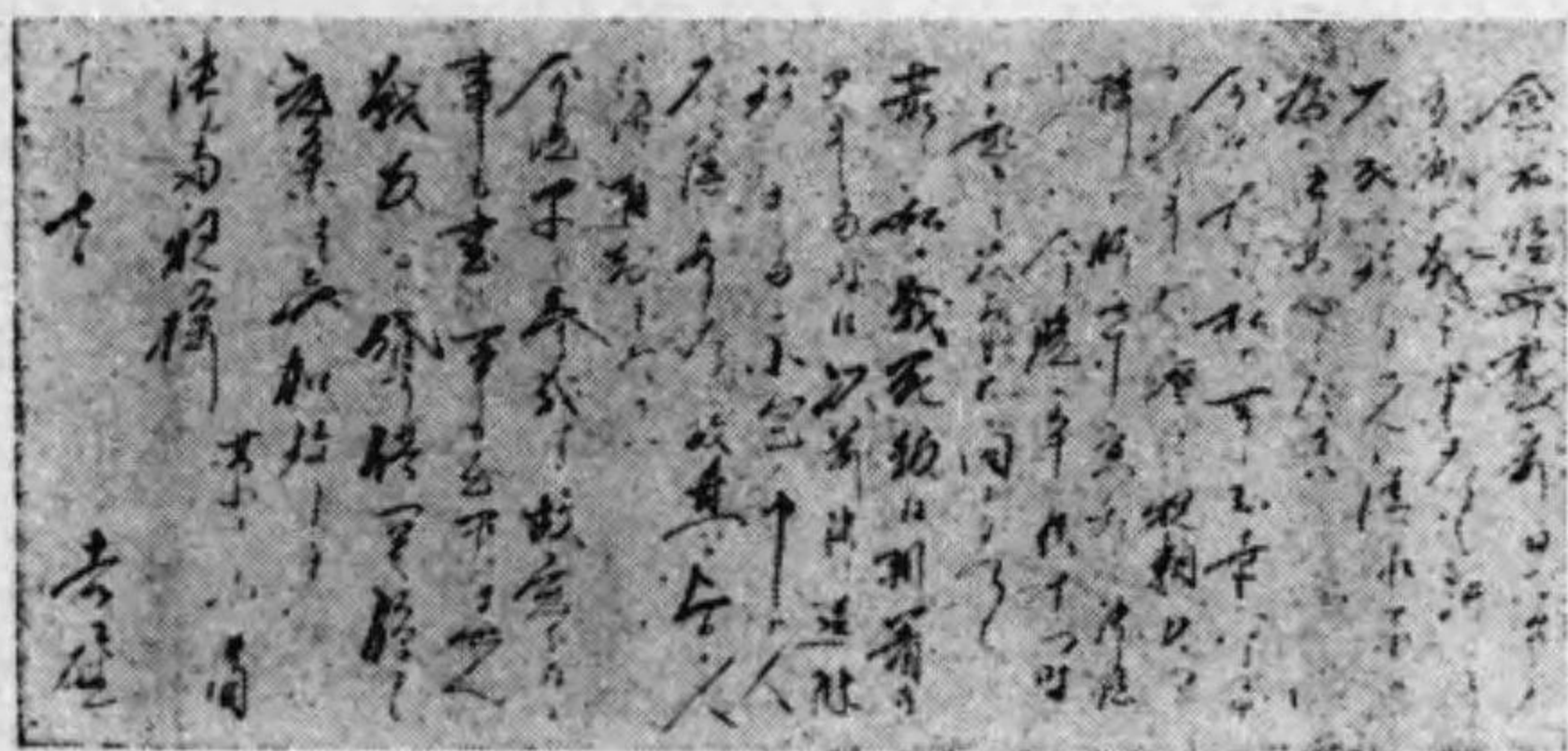
今度に於て私に若し不幸なる事がありましたる際は親類皆々様に何卒宜敷く御傳言下さ

い。今晚の午後〇〇時に起きて攻撃に向ひます。」

絶筆である。彼は靜かに讀み返して封筒に納めた。

時は迫つた。遙かの洋上より宮城を拜し奉り、父母在す日本の國に最後の敬禮をした。

勇士の面上には生死を超越した必勝の信念があり、きつと結んだ鉢巻が曉の闇に白い。



絶 筆

「成功を祈るぞ。」

送るものも今はみな無言である。分隊長北島機に続いて發艦、勇躍壯途に就く。征つて還らぬ門出である。

時まさに十二月八日午前〇時。

海上には北東十七メートルの強風が吹きまくり、暗雲が低く垂れこめてゐた。

皇國の興廢を翼にかけて、この一舉に敵を粉碎しようといふのである。果してハワイ上空に達し得るだらうか。雲はいよ／＼深い。

豫定の時刻である。と、雲の隙間より脚下に眞珠灣の海岸線が白く光り輝いてゐるのが見えた。

「しめた。」

全機雲を縫つて降下に移る。

おゝ、ゐる、ゐる。夢にも忘れたことのない敵の主力艦が全部集結してゐる。瞬間、眼頭がジーンとして滿々たる闘志が湧く。カリフォルニア型、メリーランド型、ペンシルバニア型等々アメリカ太平洋艦隊の主力がすらりと並んでゐる。港内は眠つたやうな静けさ。

總指揮官機はこの時既に、

「われ奇襲に成功す。」

と、打電した。

敵は漸く氣づいた。防禦砲火は周章狼狽亂射亂撃である。

西方より高度を下げて接敵し眞珠灣港口を過ぎヒツカム飛行場上空を低空にかすめた。

港内フォード島東岸である。目指す戦艦は目前にその巨體を横たへてゐる。

はやる心をぐつと制する。編隊を解き各個に攻撃だ。

「發射用意。」

「必殺の意氣をこの一發にこめて無念無想の一瞬。」

「射て！」

二番機に続いて雷撃した。

「偵察員、魚雷はどうした。」

操縦者の叱咤の聲!!

「走つとります。走つとります。航跡白い、白す。」

魚雷は生きもののやうに走る。

眞珠灣は水深僅かに十五メートル餘、空中魚雷は海底に突きさゝるおそれがある。雷撃隊の苦心はそこにあつた。

快心の發射である。

さつと上げ舵をとつて敵艦上空を斜に横切つた。瞬間、あゝ愛機はぱつと火を噴いた。敵高射砲彈の命中である。今はこれ迄、眞一文字に敵陣目がけて自爆した。この時早く魚雷は

見事敵艦に命中し水柱を高く天に奔騰せしめた。

時に午前三時半（日本時間）。春秋有爲の荒鷲は、櫻花の散るにも似て華々しく眞珠灣頭に、護國の神ともなり、必殺の刃ともなつて、深く深く地軸も徹れと突込んだ。

數年前にさかのぼる。優秀な成績で尋常小學校を終へた彼は縣立七尾中學校に入學したが、家計の不如意から燃える向學心を斷ち切つて高等科にかへつた。残念でたまらなかつた。しかしがまんしなければならなかつた。

「負けるものか、負けるものか。艱難汝を玉にするといふではないか。」と、自分に言ひ聞かせてゐた。

この頃である、海軍々人として身を立てようと決心したのは。

高等科を卒業するや直ちに金澤に出て、松ヶ枝町の生絲商に、更に石浦町の九谷焼商に店員として働いた。

「さうですね。これといつて別に變つた所のない子でした。何かあればいゝのですが。」と、當時の吉雄君について主人は語つてゐる。

「えゝ、何時も歌を口ずさみながら仕事をした男でした。」

「眞面目な朗らかな子だつたね。腹の立つ様な時は、はつきり顔色に出すといふやうな所があり男性的な子だつたね。夜は暇々に一心に算術を勉強してゐましたよ。私も其の相手をしてきましたが……。」

と、同僚の一人がこたへる。

極めて平凡な、しかし氣概のある少年だつたのだ。小學校時代は劍道や競技部の選手を、首將として大いに活躍したといふ。

店員時代の雑記帳に、

「今日一日三恩を忘れず、不足の思ひをなさぬこと。」

今日一日腹を立てぬこと。

今日一日嘘を言はず、無理しないこと。

今日一日人の悪口を言はず、己の善を言はぬこと。

今日一日の存命を喜び、稼業を大切に勤むること。

右は今日一日の慎みにて候。」

また

「苦しかつたらため息をつけ。悲しかつたら泣いても見よ。しかし仕事を止めるな。働くことだけは一貫せよ。」

とある。十六・七歳の少年としては立派な心がけではないか。不遇の二ケ年間、店員生活の裡にもかうして人知れず修養を続けたのだ。自分の長所短所をよく知つてゐたのである。

不撓不屈、苦難に打ち克つ精神はこの間に自ら養はれた。

年來の志望だつた海軍志願兵に合格出来たとき、どんなに嬉しかつたことか。

昭和十三年六月一日、郷里鹿島郡相馬村宇吉田の家から憧れの呉海兵團に機關兵として入

團したのである。軍艦日向の乗組を経て、鈴鹿海軍航空隊第〇〇期偵察練習生となり、日夜激しい訓練に努力したのは昭和十四年の事である。

今、彼の反省録によつてその苦闘の跡を辿らう。

四月二日より四月九日迄。

「自分は今週通信の方で頭を悩ました。如何なる手段で勉強すると上達が速いかといふことばかり思つて一日何も考へずスピーカの音色のみ聞いてゐた。又一日は、笛を吹いて勉強した。又一日は合調音表を一生懸命に讀書する。又一日はツートンの符號で勉強した。」とある。努力苦心の程に自ら頭が下るではないか。

四月三十日より五月七日迄。

「緑深き五月名譽ある偵察練習生を命ぜられ愈々楽しい。——何分練習生を命ぜられし以上は只努力だ。入校式の司令訓示を守り一層努力を致す覺悟なり。」

困難な試験を無事突破し練習生に合格した喜びが包まず述べられ、そして新たな決意が記さ

れてゐる。

七月の反省録には機上作業の不首尾に對する深い自責の念が認められ、九月のそれには次の事が冒頭に記されてゐる。

「今日迄の反省録を見ると字の訂正されるのが多いから今週からは少し多き程に書くことにする。」

眞摯誠實な人柄がよくうかがはれる。而して十月十六日より十一月五日迄の反省に

「秋の空高く天氣續きで機上作業も進み、通信も終り航法になつた。——何分最後であるから最善の努力をして機上作業を終る覺悟である。海ゆかば水漬く屍、山ゆかば草むす屍とある如く、我々航空に職を奉ずるものは空の白雲と散るのが本望だ。」

と。見よ、烈々たる殉國の精神を。

「大君の邊にこそ死なめ、願みはぜじ。」の至忠至純のまごころが、わが軍神清水吉雄の精神であつた。

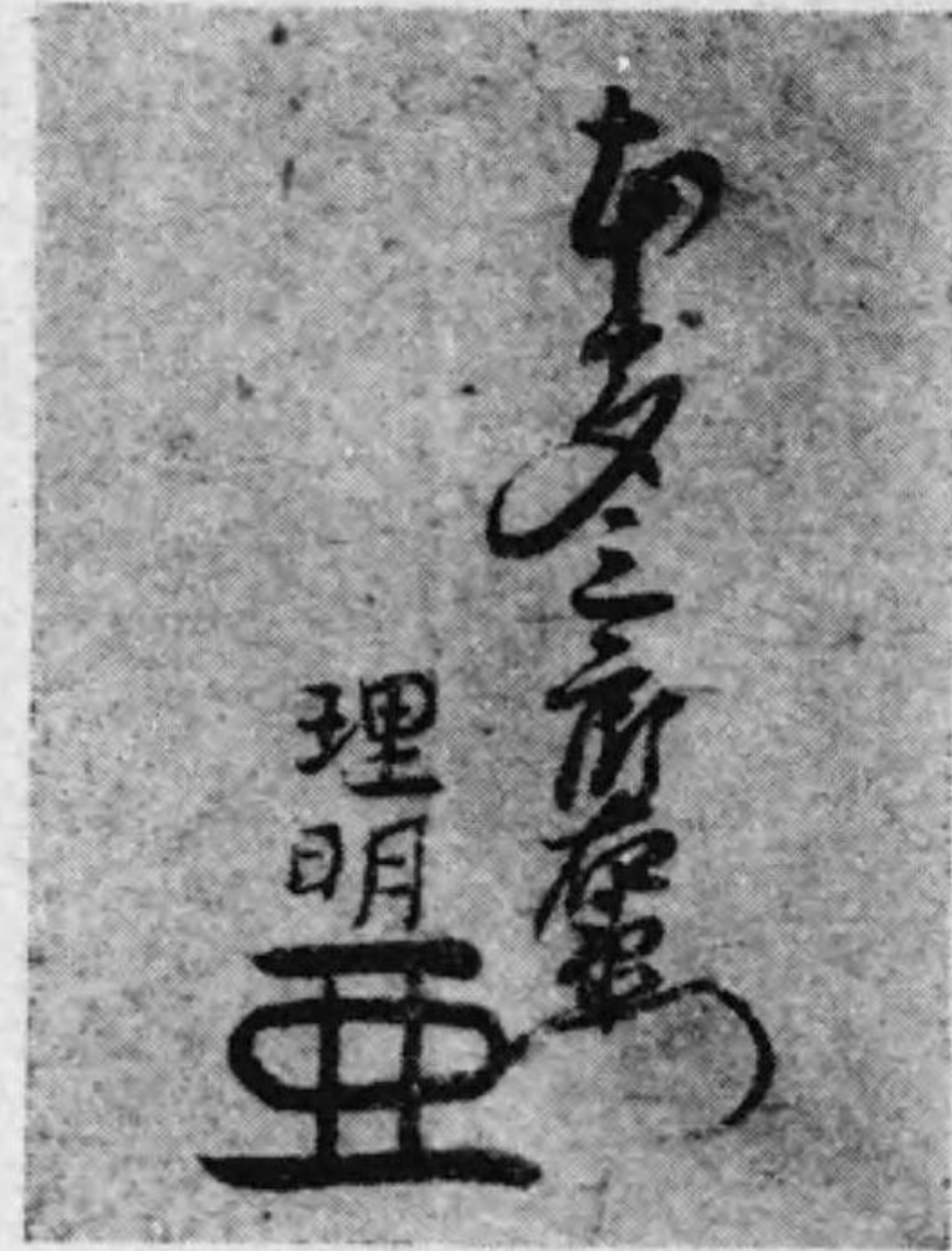
若冠二十有一歳、大東亞戦争の緒戦に、不滅の武勳をのこした彼は、昭和十六年十二月八日附を以て特に海軍二等飛行兵曹に昇進し、更に昭和十七年十月十五日特旨優賞の恩命に浴して功六級勳七等旭日章を賜はつた。

遺書の中に次の言葉がある。

「大日本帝國に生を享け若年勇躍海軍々籍に身を奉じ、此處に御奉公出来るは光榮の至り、大和男子の本懐之に過ぐるものなし。愈々戦の庭に立ちし以上は日頃の父上様の御言葉を肝銘し帝國の大利益なる事を思へば萬死の巷に邁進致します。今更何一つ思ひ残す事はありません。」

何とも名状し難い切々たる誠が讀むものの心頭をうつ。

郷里相馬村には父清岑氏をはじめ母・姉・弟、なほ今も健在である。



本 多 利 明

徳川家治、家齊時代は、天變地異が打ちつづいた。したがって武士の困窮や農村の疲弊が、時を追うて甚しくなり、何とかしてこれを打開しなければならなかつた。

一方對外關係を見ても、ロシアの勢力が東進してシベリヤに入り、將軍綱吉の頃には既にカムチャツカ半島に達してゐた。そして北海道・千島・樺太方面で、日露兩國が衝突することとなつたのである。

明和・安永の頃には、識者は北海道に注意を集中し、開發經營を論ずる者がしばしばあらはれた。工藤平助が開國論を始めて唱へたのも、この一つのあらはれである。幕府も捨てておけないので、天明五・六年に北海道、樺太方面の調査を行つた。

寛政四年に露國使節ラクスマンは、わが漂流民伊勢の水夫幸太夫らを送つて、北海道の根室にやつて來た。そして書を幕府に出して通商を迫つたのである。林子平が「海國兵談」を著はし、國防を論じた爲、世間を騒がせるものとして罰せられたのも、この頃であつた。時の老中松平定信も海防のゆるがせに出來ないのを痛感し、沿海の防備を嚴重にすると共に、

自ら巡視するほどであつた。近藤重藏は命を受けて寛政十年遠くエトロフ島にまで赴き、また伊能忠敬は北海道地方の測量に従事した。

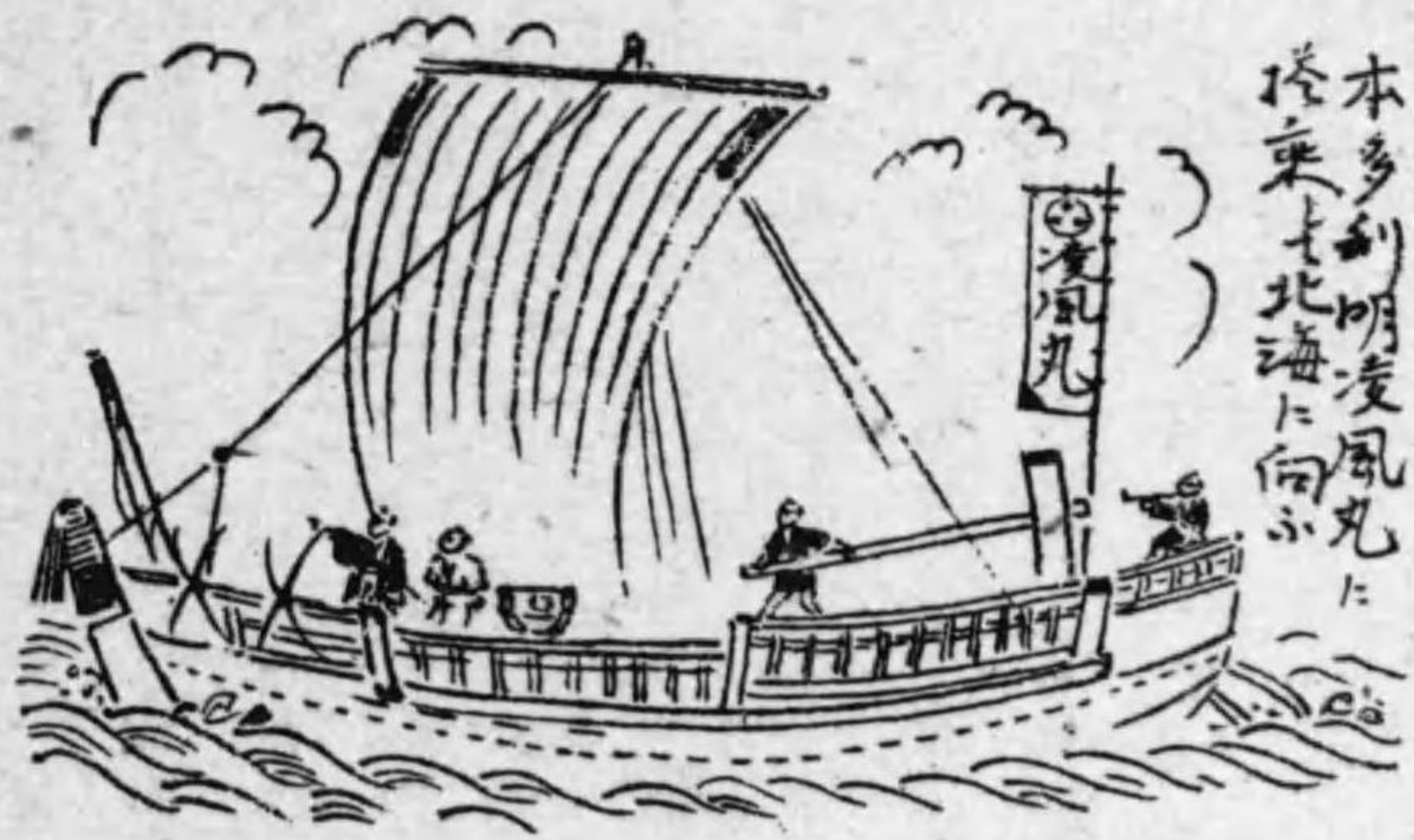
其の後文化元年にロシア使節レザノフは、またもわが漂流民四人を送つて長崎に來り、通商を請うたが、幕府はこれを拒絶し、文化五年間宮林藏を樺太に遣はして探檢せしめた。

このやうな内外の情勢にあつた時、本多利明は、十八歳で江戸へ行き、關孝和の高弟今井兼廷について數學を學び、千葉歲胤に天文學を習ひ、尙山縣大貳について劍術を修めた。

二十四歳の時、既に江戸牛込の音羽に私塾を開き、數學・天文・地理・測量について子弟を教へ、音羽先生と敬まはれてゐた。

後、教育のことを門人坂部廣胖に託し、自ら各地をまはつて地理・民情を察し、物産の有無、交通の便否などを調べた。この結果、交易の道を開き、民俗を改善するの必要を感じた。そして内地諸藩の間ばかりでなく、廣く國際間にもこれを實現し、大いに國富を増進したいと考へてゐた。殊に北海道の開發は最急務であると叫んだ。

本多利明凌風丸に
控束し北海に向ふ



—この北海道を開拓すれば、國富は現在の倍に増加し、北邊の護りまた安泰である。

北海道を如何に開發し、どんなに經營したら良いか。

その根本策としては、北陸・奥羽地方からの移住を奨励し、土人をこれらの人に見習はせながら、ゆるゆる衣食住、慣習の移植、教育の普及をはからねばならぬ

—

かく唱へて天明四年四月利明は自ら凌風丸の船長として北海道へ向け出發したのである。

各地の藩侯は、この利明を招いて藩治に資せようとしたが、利明はかたく辭して應じなかつた。北國の雄藩前田齊廣も、どうかして利明を招きたかつた。度々使者を利

明のもとに走らせた。利明にとつては加賀はなつかしい國である。父の出生地である。諸藩の招きを固辭してきた利明も、齊廣の幾度も招きを斷りがたく、且は父の國といふ情にほだされて、文化六年五月十九日金澤に着いたのである。

本多利明の來着によつて、尾山城下は、新しい文化の恵みに浴したわけである。

利明は、しばし齊廣の御前で

「カムチャツカ方面は鮭の漁獲が多く、従つてこれまで我が方と米・煙草・酒・小間物類との交易をしてゐましたが、享保の頃からカムチャツカ方面へロシアの官船が來て交易するやうになつたため、土人らは自然日本人をうとんするやうになりました。

我々は、同島の領有を策しなければなりません。それにはロシアの役人が來てゐると思ひますが、これには頓着なく、我から役人を派遣し、郡縣を置いて、土人を治めなければならぬと存じます。

樺太・滿洲については、樺太に大城廓を建立し、滿洲との交易を圖ります。樺太に於ける

商人、運上屋と稱してをりますが、これを利用して、領有を策しなければならぬと思ひます。カムチャツカ・樺太に大都會が出来れば、その勢に乗じて、南洋の島々に進出して、日本の威光を輝かせ、更に遠くアメリカをも従はせなければならぬと存じます。かやうにこれらの島々が開發されましたならば、東洋に大日本、西洋にイギリスと、世界の二大富國、二大強國が出来るとは確實であります。」

と、世界の情勢及び海外經略についての意見を申し述べたのであつた。

「かやうに積極的に海外に進出するためには多くの船舶を必要とし、且航海術の發達を期さなければなりません。」

と、軍艦の模型を作つて、これを城内二の丸の能舞臺に陳列し、操縦の法をも説明したのである。

利明が金澤へ来て、一月餘りもたつた日である。風のないとてもむし暑い日であつた。座敷で着流しのまゝ風を入れてゐると、そこへ來客である。錢屋五兵衛といふ當地の商人であ

る。聞いたこともないが、利明は會ふことにした。如何にもかつぶくのよい、眼の鋭い、堂堂たる體軀の持主であつた。

「初にお目にかゝります。近在の宮腰にをります錢屋五兵衛といふ商人でございます。先生の御高名はかね／＼お聞き申してをります。」

「いや、どうも、ようこそお出で下された。」

初對面の挨拶が終ると、五兵衛は、

「先生が日頃外國と貿易して日本の國富を増さねばならぬとのことですが、是非御高見をお聞かせ願ひたうございます。」

と、來訪の目的を告げた。利明も無名の一地方商人について、初めは警戒しながら話してゐたが、その態度、言語に誠に熱心なものがあつた、だん／＼と熱を帯びて、胸襟を開いて語つた。

「と、申されると、先生は長崎に於ける貿易は、消極的にして且わが國にとつては不利で

あると申されるのですね。」

「その通り、わが國が精製品を作つて積極的に外國貿易に乗出すべきです。支那・オランダのみを相手とすべきではありません。」

「さう致しますと、ロシアが最近日本へ通商を求めてゐることですが、ロシアに對してもお許しなさらうとの御意見で……」

「勿論です。露國と貿易を開き、且その國情を探りながら北邊の防備をなすべきです。」

「なるほど、一石二鳥ですね。」

二人は、カラ／＼と高らかに笑つた。

「外國貿易のためには多くの船舶を必要とします。大船を建造しなければなりません。航海術を研究しなければなりません。四面海に囲まれた、わが日本は海に向かつて進出し、發展すべく運命づけられてゐるのです。上古に於ける三韓の服屬、支那との交通、近くは八幡船・御朱印船の如く、皆しかりです。それが、唯人爲的に阻止されてゐるに過ぎないの

河野多利明の書翰

利明は、加賀にゐること僅か半年であつたが、ついでに江戸に引揚げた後も前田侯の本郷邸の傍にゐたため、藩士の教を受ける者が多く、又遠く書信を往復して常に指導を受けてゐた。利明は、七十八歳にして天壽を全うした。門人ら、死を惜しみ、碑を金澤市傳燈寺境内に建てた。

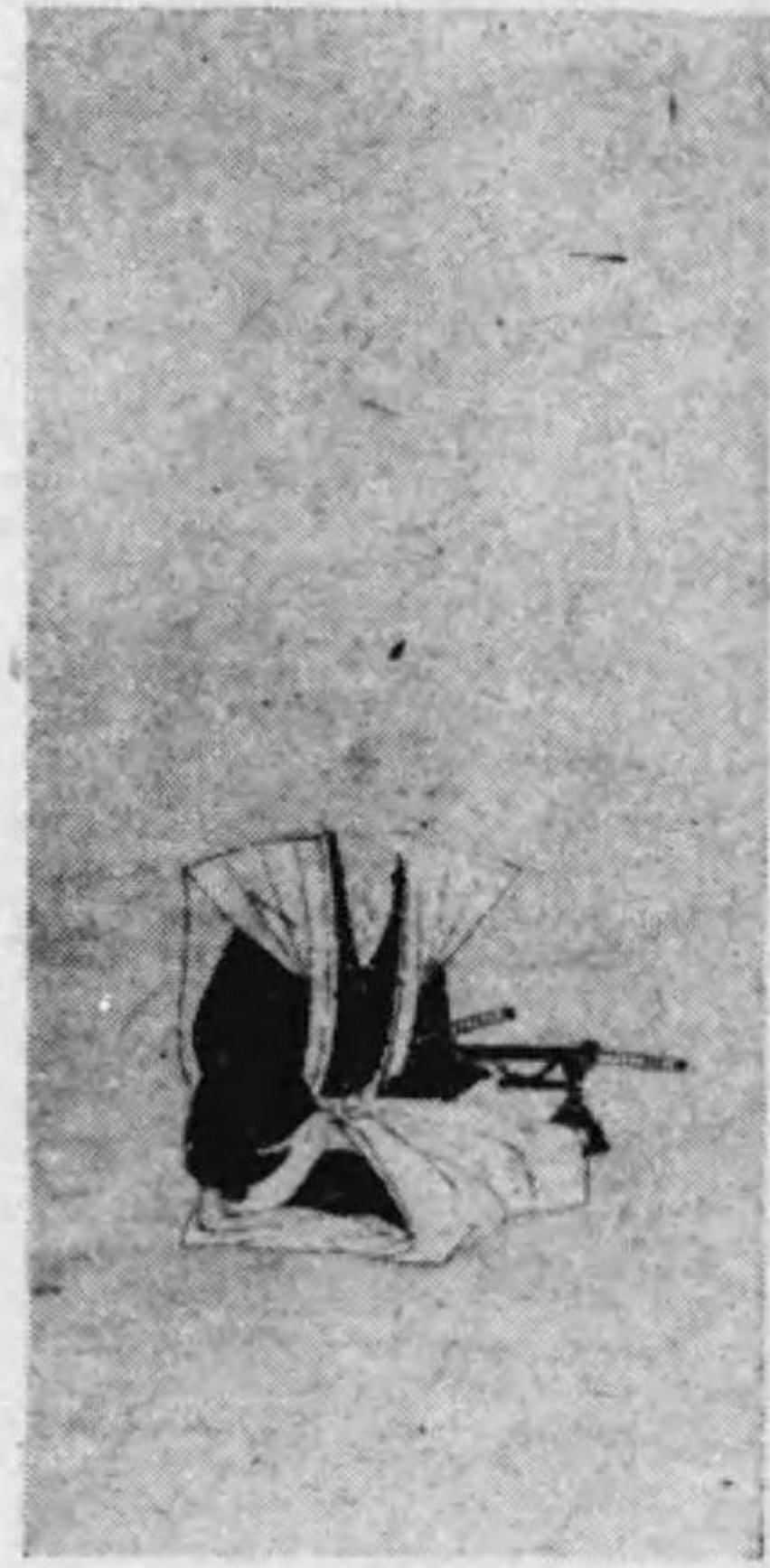
本多利明の紙手

であつて、誠に不自然といはねばならぬ。」「こもつともです、一々感服いたしました。わたしも出來得る限り奮闘し、國家の御用に立ちたいと存じます。」

意氣投合した二人の話はなか／＼盡きなかつた。利明は、加賀にゐること僅か半年であつたが、ついでに江戸に引揚げた後も前田侯の本郷邸の傍にゐたため、藩士の教を受ける者が多く、又遠く書信を往復して常に指導を受けてゐた。

利明は、七十八歳にして天壽を全うした。門人ら、死を惜しみ、碑を金澤市傳燈寺境内に建てた。

註—本多利明は通稱を三郎右衛門といひ、北夷又は



田中躬之

魯鈍齋と號す。父伊兵衛は金澤の人であるが、人を害して越後に走り、延享元年利明を其の地で生んだといはれてゐる。文政四年三月十六日歿す。(音羽桂林寺の過去帳には文政三年十二月廿二日享年七十七とある。)大正十三年二月十一日朝廷から正五位を贈られた。

こゝ金澤の城下仙石町の明倫堂では、今しも田中躬之の國學が講ぜられてゐる。紋付袴に威儀を正した躬之は、五十七とも思はれない若々しい張りのある聲で、日本書紀神代卷を説いてゐる。躬之の前にはこれ又紋付袴で行儀よく坐つた藩の子弟達が、幾分上氣した顔でじつと聴入つてゐる。時折快い微風が打開けられた窓から吹き入るといふものの眞夏の暑さは、たゞ坐つてゐるだけで汗ばんでゆく。

躬之は更に次の章を讀んでいつた。

「伊弉諾尊・伊弉冉尊共に議りて曰く、吾れ已に大八洲國及び山川草木を生めり、何にぞ天下の主たるべき者を生まざらめやと。是に共に日神を生みまつります。大日靈貴と號す。此の子光華明彩しくて六合の内に照徹らせり。」

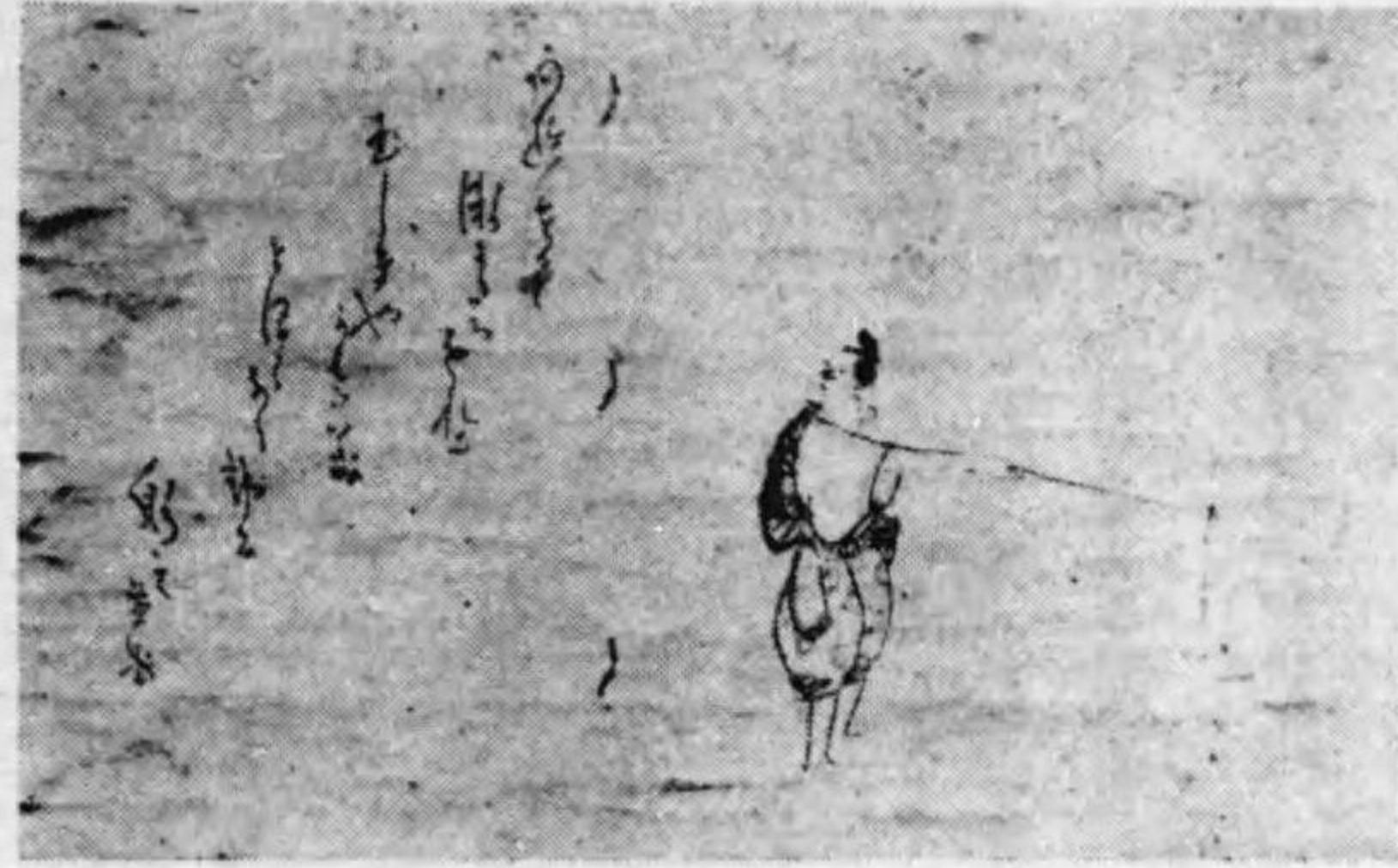
讀み終へると、躬之は靜かに見臺から目をあげて諸生を見渡した。誰かに朗讀させようと思つたのであらう。講内はしばし聲もない。思ひ出したやうに庭前の蟬の聲が聞えて来る。

躬之に注がれてゐる諸生の顔は、どの顔も、若さだけでない心の張りで、生き生きと輝いてゐる。「頼ましいぞ。」と、躬之はわれにもなく心の中でつぶやかすにはをられなかつた。

藩の子弟唯一の教育所である明倫堂で、國學の講義を實際にもつやうになつたのは極く最近の事である。それまでは、主として學問といへば儒學であり所謂五倫の道德が中心生命であつた。しかし聽て全國的に澎湃として興つた國學の渦卷は、北國の加賀藩をして何時までもそのまゝにして置かなかつたのである。藩校明倫堂では國學の講義が開かれ、その講師として田中躬之が招聘されたのである。

躬之の講義はこれで數回を重ねてゐる。講義の進むにつれて躬之の意氣込みは尋常一様ではなくなつていつた。今も學生の朗讀を俟つて、さびた聲が冴える。

「天照大神は日神又は大日靈貴とも申し上げ、その御稜威は實に宏大無邊で、萬物悉くを化育せられるのである。即ち大神は高天原の神々を始め、二尊の生ませられた國土を愛護し、諸々の品を撫育し、生成發展せしめ給ふのである。」



田中躬之筆

こゝまで一氣に説いた躬之は諸生の反應を窺つた。大切な所だ。腹の底から判るまでかみ砕いて説かねばなるまい。かう思つて諸生を見守る躬之の目は爛々と燃えてゐる。尊皇の大義を、一日も早くこの青年達に植ゑつけてやりたいのである。

やがて躬之は、「御稜威」とぼつり獨り言のやうにいつた。この語が、この青年達に嘗ていはれたことがあつたであらうか。思へば慨かはいしい時代であつた。だが、もう過去は問ふまい。今日、國體の本義に目覺めつゝある青年が日増しに殖えてゐるではないか。全く、このわしも長生きの甲斐はあつたといふものだ。一瞬ではあるがしみじみした感懐が躬之の心を

よぎつた。講義の聲は、更に一段と高まり熱氣を帯びていつた。

「大神は、この大御心大御業を天壤と共に窮りなく彌榮えに發展せしめられる爲に、皇孫を降臨せしめ給うたのである。かしこくもこの時、神勅を授けられて、儼然たる君臣の大義を昭示遊ばされ、皇國の根本を確立し給うたのであつて、こゝに神國大日本の肇國があるのである。」躬之の額にも、諸生の顔にも玉の汗が流れてゐる。陽は隣の經武館の瓦屋根にかがやき、松樹の蟬は更にやかましく鳴きたてる。

時こそ孝明天皇の嘉永五年六月の或る日中であつた。

經 歴

躬之は姓を藤原、通稱を兵庫と呼び、號を菊園といつた。祖父は玄寄、父を朴山といひ共に石川郡本吉（今の美川町）に住し町儒醫であつた。

躬之は寛政八年の生まれ、長じて京都に遊學し國學・和歌を橋千蔭の門人、上賀茂の祠官加茂季鷹に學んだ。更に醫學を新宮涼庭に就いて教を受けた。天保五年、學を終へて歸宅し、

翌六年齡四十の折住居を金澤に移したのである。

たまたま藩の老臣前田土佐守直時に仕官したが、直諫して容れられず、間もなく致仕して町儒醫となり、専ら國學・和歌の教授に當つた。教へを乞ふ者、日々その數を加へ數百人の多きに及んだ。

元治の變に活躍した勤皇志士の中で、青木秀枝、淺野屋佐平、高木有制、大野木克敏、それに藩老奥村榮實、石黒千尋、高橋富兄、狩谷竹柄等は皆躬之の講筵に列し、忠君愛國の精神を養つた人々である。

嘉永五年六月、すでに五十の坂を越して七歳、草莽の臣として終るかに見えた躬之に、藩主齊泰なりやすの召があつた。即ち藩校明倫堂講師を命ぜられ、石黒千尋と共に國學を擔當して、古事記・日本書紀・令義解りぎげを講じた。躬之は心から皇國の尊嚴なる所以を説き臣民たるもの自覺を促したのである。安政四年齊泰は類聚國史の缺逸するのを憂へ、國學者に命じてこれが補修の任に當らしめた。その際特に躬之は命を受けて、編纂を督する事になつたが、惜しい

哉その業の緒に就くに先だつて同年七月十九日病歿した。時に六十二。その墓は山ノ上町二丁目光覺寺境内にある。

和歌

躬之は京都に遊學中、和歌の道にも精進した。その師と仰いだのは萬葉集の研究者として當時知られた加茂季鷹であつた。躬之の歌は氣品高く格調のすぐれたしかも憂國の熱情に溢れたものが頗る多く、爲に指導を乞ふ門人は踵を接して來り、やがて郷土歌壇の興隆時代を現出したのである。今、躬之の歌集「菊園集」から若干拾つて見よう。

人 物

和氣清麻呂

難波瀉かくる、蘆はかならずや身をつくしても御代はけがさじ

楠木正成

湊川そのみづくと沈みても流れて世々に浮かぶ君が名

本居宣長